

ネット言論のインパクト：ネット言論との接触は、若者をどう変えるのか

MINAMI, Hiroyuki / 南, 宏幸

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

TAMA BULLETIN / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

115

(終了ページ / End Page)

185

(発行年 / Year)

2022-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025119>

ネット言論のインパクト

ネット言論との接触は、若者をどう変えるのか

南 宏 幸

この論文の要旨

この論文は、

- I 筆者・南が行った実験の概要報告
- II およびその結果報告
- III ネット言論の特質の考察
- IV その特質との関連で実験結果を理解する試み
- V 付論、とから成る。

I 実験は、

- ① 大学新生を対象に、まず或る社会問題に関する新聞記事を読んでもらった上で、その問題に関する賛否、そして新聞とネット言論に対して、どのように評価するか、を問い、答えてもらう。
- ② 同じ被験者に、今度は同じ問題に対するネット言論の書き込みを読んでもらい、①と同じくその問題に関する賛否、そして新聞とネット言論に対して、どのように評価するか、を問い、答えてもらう。…という手順で行い、得られた①と②のデータを比較することで、ネット言論との接触がもたらした変化を具体的に見ようというシンプルな意匠に基づくものである。

II 実験結果は、

- ①の賛否では、最大で+100/最小で-100の賛成/反対が可能なところ、平均してほぼ+50の強度の賛成が得られるという結果になった。新聞記事は賛成するように読者を導く内容だったので、この+50は新聞記事への賛同でもある。しかし

②の賛否では、賛否の平均はほぼ0の中立点に移行した。これは全体として見た場合、ネット言論との接触によって、①で得られていた賛成がほぼ全て撤回されたに等しい変化である。

新聞/ネット言論に対する評価では、平均を見る限り、「新聞が評価を下げ、ネット言論が若干評価を上げる」という変化が大筋で得られたが、この評価変化は賛否変化に比べて小さく、賛否変化とは異なり変化の方向の分散も目立ち、賛否の変化と各評価の変化との相関は認められないか、あるいは弱かった。結果として、大筋で「信頼できない」と一貫して評価しているネット言論に、被験者達は賛否の面でなぜ強い影響を受けるのか、という謎が浮上する。

Ⅲ この結果を理解していくために、まずネット言論の特質の考察が行われた。マスメディアなどでは、掲載する言説を選別する編集者・選者が存在し、メディアが負っている権威や信用が掲載された言説にも分与される。しかしネット言論にはそのような権威の利用・配分が見られない。ネット言論で権威や信用が現れるとしたら、それは投稿された言説に対する支持や共感から獲得されるものであって、権威からの事前の分与によるものではない。したがって「ネット言論」は事前の信用を端から持たず、必要とせず、期待しない。またネット言論は多様な視点から、報道のディテールに拘った指摘が書き込まれ、賛否を直接論じるような投稿は稀である。しかし同時にマスメディアの欺瞞・隠蔽などの情報操作に対しては敏感で、敵視しているメディアによる欺瞞を暴こうとする反マスコミなどの動きは大規模に広がり、視点の複数性による強力な発言力を有する。またそこでもたらされた発見・暴露はたちどころに共有されるので、マスコミへの同調を撤回させるようにはたらく影響力は大きい。またユーモアを多用する傾向から、マスコミが導出した深刻・厳粛な雰囲気滑稽化する効果も大きい。こういったネット言論の諸特質が指摘された。

Ⅳ 資料②で被験者に提示された具体例で、ネット言論の諸特質が確認され、それが被験者に与えたインパクトの再構成が試みられた。その結果、全体的には「信頼できない」と評価しているネット言論に、個々の投稿を通じて強い影響を受けるという謎めいた事態への理解が可能になることが示された。

Ⅴ 状況論的観点を利用することで、ネット言論のインパクトの、より詳細な追跡が可能になるという見通しが、例示された。

要旨は以上である。

I. 実験の概要

I-1. 実験企画の背景

社会心理学では、現実を観察される人々の心の動きや行動から、そこに関与しているであろう単純な効果の一つ抽出し、定式化し、検証・適用するという研究作業が広く行われている。複雑怪奇な現実から「○○効果」「××理論」などと命名・定式化される単純な要素を取り出して、分析用具セットに新たに追加するのである。このような分析的アプローチは、複雑怪奇な現実に対処する上で有用かつ必要であろう。しかし分析用具の数が増えるにつれ、逆に現実の理解という目標からは遠ざかっているのではないかという印象も時に生まれてくる。『○○効果』という観点から言えば、ここで○○行動を取るベクトルが人々に働くだろうが、『××理論』の観点から言えば、××傾向が生じる可能性も考えられる。しかし『△△バイアス』の理論によれば…」などと、分析用具の適用可能性が増えるばかりで、「このケースでは、どの分析用具をどの程度適用することが適切な現実理解を生むのか」、見定める方法が見失われているのではないかと懸念されるのである。

そこで私自身としては、分析用具を増やし、整えるという専門業者の欲望にはしばしば背を向け、より素朴に現実の「複雑怪奇さ」に直面するところから始めたいという欲を持った。有用な道具が発明されていくことは、喜ばしいことである。しかしピカピカの道具を数多く揃えた職人が、優れた仕事をするとは限らない。現実にはあまりに複雑・多様で規格化不足なので、いかに多数の道具を揃えようとも十分ではなく、結局、とりあえず道具として利用できる何かを工面する創造力、あるいは、これといった道具を持たないまま何らかの工夫で対応する臨機応変さが、現場ではしばしば物を言うことになるからである。そこで私は、需要をあてにした道具造りに参加するのではなく、先に現場に出て、問題に直面してから、解決策を模索する、という方向性を採用することにした。被験者に或る現実の断片をぶつけ、反応を見て、次いで別の現実の断片をぶつけ、次の反応を見る。そ

うやって、人々が直面している現実の相似状況を実験的に作り出し、反応を記録する。そしてこの記録から、人々の反応や変化を理解するためには、どのような観点や分析用具が必要なのか、考えていくのである。この実験は、既知の謎を何らかの理論・分析用具で解けることを証明するためというよりは、解くべき謎があることを示すために行われたわけだ。

とは言え、この論文で報告する「実験」は、当初は、入門系授業で指導を担当する新入生に、メディア・リテラシーの問題をリアルで身近な問題として実感してもらうために教材として案出した企画であった。しかし被験者の反応が予想より鮮烈であったし、教育的効果も高いと判断したために、その後も同じ「実験」を同じ時期（春期第二回目授業の前半）に繰り返して、データ収集を続けることにした。この実験は特に期限も想定せずに続けていたが、結局、2020年に新型コロナウイルス対策の影響で、その時期に対面授業を実施できなくなり、中断を余儀なくされた。そこで、集めることができた2014～2019年の6年間分の反応データを使い、暫定的な実験の報告をここに提出することにしたのである。

この実験で特に私が注目したのは、「ネット言論」^{〔*注1〕}と呼ばれるものの「特異性」とその影響力である。親や教師、マスコミなどから常識・良識、倫理・道徳等を受容してきた若者が、それらとは異質な面をも持つ「ネット言論」に接した場合、どのような影響を受けるのか（あるいは影響を退けるのか）、これは今日、重要な関心事でありうるだろう。かつての「2ちゃんねる」（現「4ちゃんねる」）のような、存在が際立つ巨大なネット言論の「センター」が相対的に衰退し、コミュニケーションツールとしてより制約をかけやすく安全性に勝るSNSへとネット言論の主要なフィールドが分散したため、今日では社会問題としての「ネット言論」が注目を集める機会は減ったように思われる。しかし見えにくくなったからと言って、なくなったわけではない。「ネット言論」の特徴や傾向は、ブログや動画投稿サイトでの「インフルエンサー」の投稿やそれに対するコメント、ニュースサイトでのコメント、折に触れて衆目を集めるSNS上のやり取りや事件、ゲームプレイヤー達のチャットやコメント等、ネットの様々な活動領域に、今日でもその痕跡を容易に見出すことができる。今日の若者は匿名掲示板全盛期の若者たちよりも、“それと知らずに「ネット言論」の影響を受ける”可能性が高まっ

たようにさえ思われる。

したがって、まずマスメディアの言論との接触済の「初期条件」を見て、次いでネット言論との接触による影響を見る、この手順によって、今日の若者の多くが直面する状況の一面を、ミニマムな形で相似的に再現できるのではないかと考えられた。

ただし、私の実験の研究上の意図は、「ネット言論の影響力の大きさを測定する」といった点にはない。そうした影響力は、当然ながら言論の内容と読み手の反応に従って大きく変化するだろうから、特定のトピックに関する、少数の投稿とそれに対する少数者の反応から測定しようとするのは無謀であろう。また、今日学際的な関心と呼ぶトピックとなっている「若者に対するインターネットの影響」について、何らかの一般論を提供しようという野心も私にはない。当実験の主たる意図は、極めて特殊な実験的状况を通じて、「ネット言論に対する評価と、ネット言論との接触によって生じる影響力との相関は、高くないだろう（「匿名のネット言論なんか無責任で、全く信用できない」と考えている者でも、実際にネット言論に触れたら、しばしば大きく影響を受けうるだろう）」という私の短期的予測を検証し、この「信用していないネット言論に従って意見を変える」という、謎めいた行動をどうすれば理解できるのか、考えていく端緒を得ることである。

I-2. 実験の具体的な方法

既述のとおり、実験は2014年から2019年にかけて、新入生を対象とした授業の春期開始直後に小教室で行った。自らの関心に従って研究テーマを選び、研究方法を案出し、調査や実験を実行し、結果を考察する…こうした一連の研究作業を経験してもらい、今後の大学での研究活動に備えてもらうという趣旨の授業である。新入生を対象としたこの授業で、しかもその春期開始直後を選んで実験を実施したのは、私を含めた教員達の考え方や関心あるいは嗜好について、新入生達がまだ殆ど知識を有しておらず、研究にとっては不要なノイズとなるかもしれない個々の教員への迎合・忖度や反発を、最小限に抑えられるだろうと期待されたからである。小規模授業であるため、被験者は少ない年で18名、多い年で23名であり、6年間の総計では121名であった。一年毎の被験者が少数であるため、

年毎のデータを比較し、その経時的変化を追う意義は薄いと考えられたので、6年分の121名分の反応データを纏めて研究対象とする。

実験実施の具体的な手順は、以下のようなものである。

2-0. 実験序盤

授業開始直後、まず私が被験者に対し、以下のような実験説明を行う。

“私が以前考え出した、ちょっとした実験のようなものに、まずは実験される側の人間として協力していただきたいと思います。接する情報に応じて、人間の意見はどのように変わるか、あるいは変わらないかを見る、メディア・リテラシーにも関わる実験です。私が随時行う口頭説明を聞き、これから順次お配りする資料を読んだ上で、幾つかの質問に答えていただくという手順を、被験者には2回繰り返していただくことになります。実験自体はそれで終了ですが、来週からはここで得られたデータを皆さんに研究者の視点から分析・考察していただきます。研究される人間の視点で答えた回答を、今度は研究する側の人間として詳しく調べ、考察するわけです。こうして皆さんは研究というものの一端に触れて勉強になるでしょうし、私としても興味深い研究データが集められるので、一石二鳥。ご協力をお願いします。なお、2009年以前には社会問題・政治問題となっていた事柄に対する意見を皆さんに窺うこととなりますが、どう答えたとしても私からその意見を褒められたり、批判されたりすることはありません。それに2009年頃一定の決着がついた問題ですので、皆さんが今さらどういう意見を持とうと、問題に社会的な影響が出たり、その意見に対する責任を問われることはありません。現在進行中の時事問題などを取り上げると、そうした点で厄介かもしれませんから、敢えて時代遅れ的话题を使用して実験を企画している次第です。ですから、訊かれた各時点で、どう感じたか、各自がその都度、率直に記してください。集めた回答は私が研究資料として匿名性を確保したした状態で扱い、もっぱら研究・教育の目的で使用します。また、次週皆さんにも回答者の氏名がわからないように匿名化した上で数値データのみをお配りし、皆さんご自身にも教材・研究資料として授業内で活用していただき、そのデータから読み取れる事を探っていただきます。よろしいでしょうか。問題がなければ、実験に入らせていただきます。

す。…ではご協力をお願いします。”

これまで質問や異論等が提起されたことはなかったので、この冒頭説明後に実験開始となった。

2-1. 実験の第一局面（マスメディアとの接触）

次いで被験者となった受講生に対して、A3紙に3つの新聞記事を引用した資料①と、同じくA3紙で、左右両面を持つ「質問－回答票」を配布。そして「質問－回答票」は縦に二つ折りにして、まず左側の面（便宜上「質問－回答票①」とする）を上にして机の上に置くように要請する。その状態で被験者は、過去に社会問題とされたトピックについて、私から必要最小限の口頭説明を受ける。

具体的に言えば、下記のような、①「生活保護」「母子加算」といった制度や、その変化に関する説明と、②資料に引用された新聞記事の背景説明、以上二種の説明がなされる。

①生活保護関連制度や、その変化に関する説明

・生活保護：「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と謳う日本国憲法25条に基づき、この権利を保障するのが生活保護という制度。居住地域その他の諸条件に応じて定められる最低生活費に満たない収入しか得られない世帯が申請すれば、様々な公的扶助によって収入不足分を補填してもらえる。

・生活保護の「母子加算」：生活保護を受給するひとり親家庭（父子家庭ないし母子家庭）が18歳以下の子供を養育している場合、保護費を一定額上乘せして支給する制度。子育てを一人でしている母親には、追加的な飲食物資が必要、という認識から昭和24年に創設された。現在の加算額は居住地域や子供の人数によって変わるが、子供が1～2人ならば2万円前後、子供3人以上なら一人あたり千円以下の額が子供2人の場合の支給額に人数分加算されて支給される。

・母子加算制度の変遷：2004年に提出された専門委員会の報告書に基づき、母子加算によって生じている不公平（母子加算を含めた被保護世帯の受給総額は、自活している母子家庭の平均支出額を上回っている一要するに、生活保護を受けて

いるひとり親家庭の方が、自活している平均的なひとり親家庭よりも豊かに暮らしている—という「逆転」問題)を是正し、一律給付から自立支援のための給付に切り替えていく方針が採用された。こうして母子加算は2005年から2009年にかけて段階的に廃止され、就学支援・就労促進のための給付に切り替えられていくことになる。しかし2009年8月の総選挙で、母子加算復活を訴えていた民主党が政権を獲得し、新たな連立与党の合意に基づいて「子供の貧困解消を図るために」母子加算が復活され、就労促進費は廃止された。民主党政権下にあった翌2010年3月には、「全国生存権訴訟原告団・弁護団」と厚生労働大臣との間で、母子加算について「今後十分な調査を経ることなく、あるいは合理的な根拠もないままに廃止しないことを約束する」との合意がなされ、母子加算固定化で当面の決着を見ることになる^{〔※注2〕}。

②配布資料に引用された新聞記事の背景説明

①-1：毎日新聞の「2009/8/21 一票に願いを：09年衆院選/2 切実『母子加算復活を』 心むしばむ生活切り詰め（前半部抜粋）」^{〔※注3〕}は、2009/8/31の衆院選投票日を間近に控えた時期の特集記事。この記事掲載の10日後に実施された総選挙で民主党政権が誕生し、それにより数ヶ月後には母子加算復活も決定される。

①-2：2009/10/22, 18:52のasahi.com（朝日新聞社のニュースサイト）上の記事^{〔※注4〕}は、母子加算復活が正式に決まった時期の速報記事である。

①-3：毎日新聞の「2009/12/15 生活保護訴訟：『血も涙もない』原告側、敗訴に怒り一地裁判決/京都」^{〔※注5〕}は、母子加算・老齢加算を廃止した施策は、生存権を保障した日本国憲法に違反しており無効であった等と訴えた裁判に対する地裁の判決を伝える記事。判決では、両加算の廃止や減額は厚生労働大臣の裁量権の範囲内であり、違憲・違法であったとは言えない、母子加算・老齢加算廃止によって原告の生存権が侵害されたとは言えない等として、原告の訴えが全面的に退けられたので、この判決の不当性を強調する記事になっている
…といった記事の背景が説明される。

そしてその上で、資料①を被験者各自に黙読してもらう。

そこに引用された記事の具体的な内容は、おおよそ以下である（南がこの場で作成した要約であり、実験ではこうした要約は被験者に与えられていない）。

①-1：毎日新聞の「2009/8/21 一票に願いを：09年衆院選/2 切実『母子加算復活を』 心むしばむ生活切り詰め（前半部抜粋）」は、京都市在住の女性（46）と、定時制高校に通う長男（18）の、母子家庭の困窮を伝え、母子加算復活の必要性を訴える記事。

- ・月に一度、親子で回転寿司屋に行き、40皿以上の寿司を食べるのが唯一のささやかな贅沢だったが、母子加算廃止でこれをあきらめざるをえなくなった。
- ・乳がんの手術を受けた後遺症で右手を動かすのが辛く、働けない。夫とも離婚し、生活保護に頼らざるをえなかった。しかし働かず、テレビを見るだけの生活を送る自分を責め、うつ病になる。高血圧もあって15種類もの薬を服用している。
- ・来春定時制高校を卒業する長男に、就活用スーツをかってやる金もない。
- ・「母子加算復活は多くの母の願いだ。」が、記事前半部の結びの言葉。

①-2：2009/10/22, 18:52のasahi.com（朝日新聞社のニュースサイト）の記事は、母子加算復活を伝える、僅か100文字程度の簡潔な速報だが、「復活を待ち望んでいた人たちも多く、最初の政権交代の『果実』と言える。」と、やや扇情的に結んでいる。

①-3：毎日新聞の「2009/12/15 生活保護訴訟：『血も涙もない』原告側、敗訴に怒り一地裁判決/京都」は、「生存権を侵害し違憲」等の訴えを地裁で全面的に退けられた原告達の怒りの声を伝え、改めて原告達の（生存権を侵害された？）苦境を訴える記事。

- ・①-1の記事と同一人物の女性が原告の一人として登場、息子と回転寿司に行けなくなった、好きな音楽CDを売って米代にした、金銭面を気にして息子が修学旅行に行かないと言い出すほどだった、等と訴え、上告・裁判継続の決意が語られる。
- ・老齢加算復活を訴えた原告の一人も登場し、節約のため夜も照明はつけず、テレビの明かりを頼りに暮らしている、老齢加算がなければ「その日暮らしの生活」

にならざるをえないと苦境を訴える。

・記事の最後では、「判決は…（前政権の）政治判断をそのまま追認した。司法権の誇りを完全に失ったと言わざるを得ない」とする、原告側の声明を引用して結びとする。

被験者全員が上記のような内容を持つ資料①を読み終わったところで、被験者は「質問－回答票①」に回答するように要請される。「質問－回答票」の概要は以下のとおり。

①母子加算を復活させるべきという主張に、賛成/反対か、現時点での考えをマスへのチェック記入で表現するよう要請される（被験者の直観的な理解を助けるため、プラス側4個、マイナス側4個、中央に1個のマスを直線上に並列させ、いずれかのマスにチェックを入れてもらうアナログ式の回答方法にした。「大いに賛成」を+100（左端）、「大いに反対」を-100（右端）、「どちらとも言えない」を0（中央）とする設定で後に数値化するので、数値変化は25ポイント単位になる）。

②「そのような判断を下した理由」を、自由記述してもらう。

③「大いに信頼できる/まったく信頼できない」という信頼度、

「多数の人の意見を反映している/少数意見しか反映していない」という意見
代弁性、

「わかりやすい/わかりにくい」という難易度、

「責任感がある/無責任である」という責任感、

「自分で考えるために役に立つ/一方的に考えを押し付けてくる」という自主
思考貢献性

などについて、

新聞とネット言論の各々について、大筋で見てどのように評価するか、①と同じく並列したマスへのチェック記入で表現してもらう。チェック位置に応じて、後に私が+100～0～-100範囲の数値に置き換え、数値化するのは、賛否の問いの場合と同様である。

マスメディアやネット言論に対しては、様々な規準から評価を下すことが可能だろう。容易に思いつくものとしては「真実を伝えているか」とか、「正確に伝えているか」とかいった、真実性規準や正確性規準がありうる。しかし読者は往々にして、伝えられた情報が真実か、正確か、判定できる立場にはいないため、こうした規準は実用的ではない。読者が適用可能な評価規準は、「真実を述べているか」ではなく、「(真実を述べているだろうと)信頼できるか」なのである。こうした実用重視の観点から、上記5規準を設定し、新聞とネット言論について被験者に総合的な(したがって多分に「イメージ」に基づく)評価を下してもらうことにした。

2-2. 実験の第二局面(ネット言論との接触)

被験者達が「質問-回答票①」への回答記入を終えたところで、今度は先程の報道に対してネット上に投稿されたレスポンス・コメント約100個を並べた資料②を新たに配布する。資料②の参照元は二つある。一つは、資料①に含まれた毎日新聞の記事①-1を取り上げて立てられたネット掲示板のスレッドへのレスポンス投稿^{〔※注6〕}であり、いま一つは、動画投稿サイト上で、母子加算復活の必要性を訴えるテレビの報道特集を引用した動画^{〔※注7〕}に対して寄せられたコメントである。資料②配布後、テレビの報道特集の内容骨子を私が口頭で説明し、報道特集引用動画に対するネット言論の背景が理解可能になるように、再び最低限の情報提供を行う^{〔※注8〕}。

引用元2箇所での投稿は1000件を優に超える数に上るので、私が適宜抜粋・要約し、「荒らし投稿」への反応(アンチの人々との罵詈雑言の応酬)など、トピックと無関係な文言を削除した上で、投稿の論旨ごとに整理・再配置して作成した。資料に要約を記載する投稿を選ぶに際して、意見や物言いの選別は行っていないので、実に多様な観点から多様な反応が表現されているが、マスメディアによる誘導に従順な投稿は私が閲覧した範囲では元より皆無で、マスメディアやそこで取り上げられた生活保護受給者の言動や生活実態などへの、様々なレベルでの異論、疑問や違和感表明、虚偽や矛盾点の指摘、揶揄・非難、アドバイス等が投稿されていた。このネット言論ならではと思われる大量・多彩な投稿群からの抜粋を、被験者に読んでもらうのである。

読み終わったところで、被験者は質問票の右面（便宜上「質問一回答票②」とする）を上向きに置くように指示され、

- ①母子加算を復活させるべきという主張に、賛成/反対か、現時点での考えを、並列マスへのチェック記入で表現するよう要請される。
- ②「そのような判断を下した理由」を、自由記述してもらおう。
- ③「大いに信頼できる/まったく信頼できない」という信頼度、
「多数の人の意見を反映している/少数意見しか反映していない」という意見
代弁性、
「わかりやすい/わかりにくい」という難易度、
「責任感がある/無責任である」という責任感、
「自分で考えるために役に立つ/一方的に考えを押し付けてくる」という自主
思考貢献性
などについて、新聞とネット言論の各々について、大筋で見てどのように評
価するか、①と同じく並列したマスへのチェック記入で表現する…という作
業を行ってもらおう。つまり、マスコミ報道を読んだ直後に答えてもらった設
問とまったく同一のものを、今度はマスコミ報道とはまったく異質なネット
言論読後に、再回答してもらうわけである。
- ④「質問一回答票②」の最後には、「実験に関する意見・感想」などを書き込める
スペースが設けられており、希望者は書き込める。

「質問一回答票」回収後、南から協力への感謝が述べられると共に、“この実験
からも明らかなように、『どのような情報を与えるか』で意見を大きく左右できて
しまうのだから、ここで得られた限られた情報に基づいて母子加算賛成・反対を
決めてしまうのは、実際には危険。^{ひとさま}人様の生活を左右する問題なので、判断は慎
重であるべき”との忠告が述べられる。加えて、「興味が湧いた人のために」生活
保護や母子加算について丁寧に説明したブログ（ブロガーは母子加算擁護派だが、
説明中心で比較的冷静な言説）のURLなども参考資料として提示して、実験終了
となる（通常は、全体で1時間超の時間を要する）。

授業においては、このようにして収集した回答データを私が数値化し、個人名

を提出時の不作為な並び順に従って「m1」「f3」などの男女別記号に置き換えた上でエクセルの表にまとめ、後日そのデータ表を受講生に配布する（つまり受講生が手にする資料では、どの回答が誰のものか、直接特定できないようになっている）。次週以降の授業で受講生は、そのデータ表を読み解いて、まず「不思議な点、謎や矛盾だと思うデータ、どうしてこういう答えになるのか調べてみたいと思う点」などを、グループ内で指摘しあい、どうしてそういうことが起こるのか解明になりそうな仮説を考える、という作業に進むよう、要請される。

実験の教育上の意図

この実験を授業に組み込んだ教育上の意図は、以下のようなものであった。

- ①所与の社会問題に巻き込まれ、周囲の意見に影響されながら、正義感や道義心を動員して「どちらが正しいか」「熱く」考える「一般人」の立場で実験を経験してもらった後、今度は打って変わって、そうした「一般人」の反応を数値化されたデータとして“冷めた目で”見つめ、もっぱら「一般人」の行動を理解しようと努める、主知主義的な「研究者」の探究プロセスを経験してもらおう。この跳躍的な態度の変更を実体験することによって、研究者であること、研究者として振る舞うことのクールな特殊性を感得し、身につける端緒としてもらう。
- ②一見したところでは無味乾燥にしか見えない数字の羅列から、意外なほど色々なことが読み取れる、と知らしめると共に、そうした地道な作業を通じて現実認識を広げようという努力を経験させて、「自分自身の研究」に備えさせる
- ③マスメディアの影響力と、ネット言論の影響力、この双方を経験・実感させて、メディア・リテラシーに関するリアルで双方向的な問題意識を喚起する

…といったところである。

研究上の意図は、「1. 実験企画の背景」で既述したとおり。

なお、たんに被験者としての協力に留まらず、研究者としての探究試行によって、学生諸氏からはこの実験の実施と理解に関して多大な貢献を頂いてきた。“研

究者の視点から実験データを見直し問題設定する”、という課題に取り組む後段の授業の中で、学生諸氏からは、私と関心を同じくするような問題設定が繰り返し提起され、私としても学生諸氏と共に考える機会を、繰り返し持てたのである。「なぜ被験者たちは、無責任で信頼できないと評価しているネット言論に、強い影響を受けて賛否を変えるのか」、「ネット言論の影響を受けて賛意を大きく撤回した被験者が、信頼度評価の面では新聞の評価を大きく上げ、ネット言論の評価を大きく下げると逆方向の反応を見せているケースがある。こうした理解しにくい反応はなぜ生じたのか」等が、学生と私の間で共有できた問題意識の例である。この場を借りて、彼らと与えてくれた知的刺激に対して改めて感謝したい。

II. 実験の結果

上記要領で実施した実験で得られた結果を、本章では記述式回答はとりあえず無視し、数値化可能なマスのチェック式回答に限って見ていきたい。

II-1. 母子加算復活への賛否

まず「あなたは、『母子加算』の復活に賛成ですか、反対ですか?」という最初の設問に対する回答を見る。簡略化のために、実験の第一局面、即ち、新聞の3記事を読んだ直後で、まだネット言論に接触していない時点の母子加算復活への賛否を、〈賛否 I〉と表記する。第二局面、即ち新聞記事に加えて、ネット言論との接触も果たした直後の母子加算復活への賛否は、〈賛否 II〉である。

〈賛否 I〉は、有効回答数121で、平均値は47.11。多かれ少なかれ賛成を示す側の選択をした者が91名(75.2%)、「どちらとも言えない」を示す0値をチェックした者は19名(15.7%)、多かれ少なかれ反対を示す側の選択をした者が11名(9.1%)だった。

同じ項目を〈賛否 II〉も合わせて表で示すと、表1となる。

被験者が表明しえた最も強い賛成の値が100なので、実験の第一局面で新聞は、平均すると47/100程度の強度の賛意を得ていたことになる。しかしネット言論

表1. 賛否 I と II の基本数値

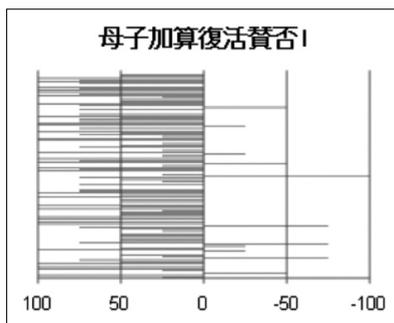
	有効回答数	賛否平均値	賛成%	中立%	反対%
〈賛否 I〉	121	47.1	75.2	15.7	9.1
〈賛否 II〉	121	1.0	29.8	46.3	24.0

との接触が起こると、状況は一変し、賛否平均値は1.0に激減し、「どちらとも言えない」という中立回答が半数に迫る46.3%を占める。全体で見た場合新聞は、第一局面で得ていた賛意をほぼ丸ごと、第二局面で失ったのである。このケースにおいて新聞への賛同を撤回させるネット言論の影響力は、鮮やかで印象的だと言えるだろう。

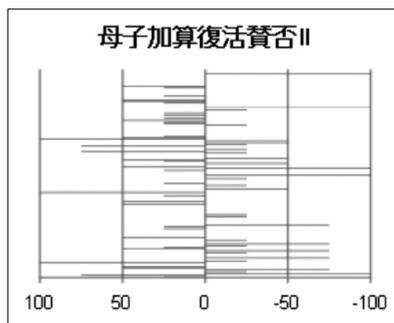
〈賛否 I〉で母子加算復活に最も強い賛意(+100)を示した被験者は31名、最も強い反意(-100)を示した被験者は1名だったが、ネット言論との接触を経た〈賛否 II〉では+100の賛成は3名に激減し、-100の反対は5名に増えている。31:1の圧倒的な形勢が、数分間で3:5へと逆転したのである。

ただし、賛成派の減り方(75.2%→29.8%、45.4%分の減少)に比べて、反対派の増え方はかなり小さい(9.1%→24.0%、14.9%分の増加)。賛成をやめた55人の内、41名もの被験者が、「どちらとも言えない」という中立ライン上へと移動したためである。

賛成・反対の強度分布を見やすいように横棒グラフを使うと、下記グラフ1と2が得られる。縦軸は1-121の被験者のランダムな列(但し並び順は固定され、グラフが異なっても同じである)、横軸が100～0～-100の賛否値である。



グラフ1. 〈賛否 I〉 分布グラフ



グラフ2. 〈賛否 II〉 分布グラフ

グラフ1に比べグラフ2が、密度が低い「スカスカ」状態なのは、賛否値0の中立点を選んだ被験者が大幅に増え（19→56人）、左右に伸びる棒の数が大幅に減ったためである。

中立ラインを選択した者の数が見えやすいように、点分布図を用いると下記の図1と2が得られる。ここでは横軸が1-121の被験者の列、縦軸が賛否値である。

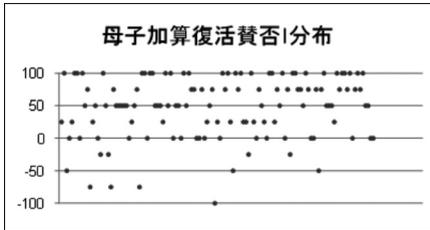


図1. 〈賛否 I〉点分布図

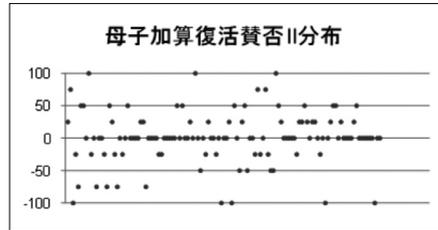


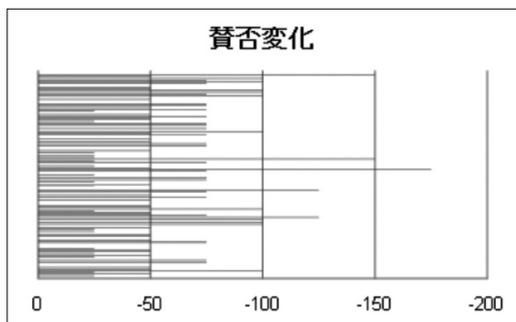
図2. 〈賛否 II〉点分布図

図1と2の比較によって、〈賛否 I〉では賛成側に大きく偏っていた分布が、ネット言論との接触を経て、中立ラインを中心としたゾーンに大挙移動した様子が窺われる。

このような中立ラインに集中するような意見変更は、「コミットメントによる束縛」、すなわち、自らの意見・立場を他者に示す（コミットメントする）と、その意見・立場に固執しようとする傾向がその人の中に生じるという、よく知られた現象からもある程度説明可能だろう。実際、ついさっきまで強い賛成を表明していたのに、ネット言論を読んだだけで態度を一変させ、今度は強い反対を表明し始めるというのは、主体性や一貫性を欠いた、かなり不名誉な行動だと感じられ、躊躇されるだろうという想像は、「ありそうなこと」として多くの人の同意を得られるだろう。この躊躇が中立ラインへの集中を招いたという考え方に、無理があるとは思われない。しかし「コミットメントによる束縛」は、母子加算復活の賛否に限らず、他の意見表明に関しても想定できる現象である。ところが追って見ていくように、第二局面における意見の移動先が中立ラインに集中し、全体の46%にも達するという現象は、一般的ではない。多くの場合、中立ラインの選択者は、10%～30%台に留まるのである（表4～9を参照）。したがって〈賛否 II〉における中立ラインへの集中は、「コミットメントによる束縛」の想定だけで解決

できる問題ではないと考えるべきである。

さて、ネット言論との接触で生じた、母子加算復活賛否の変化を横棒グラフで表すと、グラフ3が得られる。被験者毎に〈賛否Ⅱ〉から〈賛否Ⅰ〉を引いて算出した変化ポイントのグラフである。



グラフ3. I→Ⅱ賛否変化グラフ

強い賛成（+100ポイント）から強い反対（-100ポイント）へと、両極端を移動する者がいたなら、賛否変化は-200となるが、実際には該当者はいなかった。また、ネット言論への反発などから、変化がプラス値を取る事もありうるし、後に見るように、新聞・ネット言論に対する各種評価の変化では、いずれも「大勢に逆らう逆向きの変化」を示す者が存在した。しかし賛否の変化に限っては変化は一方向で、母子加算復活賛成の度合いを強める+変化を示した被験者は皆無だった。したがってグラフ3はマイナス方向の変化の度合いのみを示す、一象限グラフとなっている。

〈賛否Ⅰ〉と〈賛否Ⅱ〉で値に変化を示さなかった被験者、即ちネット言論との接触を経ても、母子加算復活に対する賛否を変えなかった被験者は33名（27.3%）、マイナス方向に賛否意見を変えた被験者は残る88名（72.7%）である。なお、ネット言論との接触後に賛否を変えなかった33名の内、〈賛否Ⅰ〉の時点で既に賛否値が0だった者が14名、マイナスだった者は8名、〈賛否Ⅰ〉の時点で賛成だったが、意見を変えなかった者は11名にすぎない。〈賛否Ⅰ〉では、中立派と反対派は合わせても24.8%しかいなかったのだから、賛否を変えなかった者の66.7%が中立派・反対派だったという数値は際立って高いことになる。ネッ

ト言論の影響を受け、母子加算復活に反対する方向に圧力が生じても、それ以前から中立や反対を表明していた少数派は、賛否意見を改める必要をそれほど感じずに済んだようだ。なお賛否値を変えなかった33名の内の1名は、〈賛否 I〉の時点で最も強い反対（-100）を既に選択しており、それ以上マイナス方向に賛否を変更しえない立場にいた。

また、〈賛否 I〉において、賛否値0の中立選択者は19名しかいなかったのに、その内の14名（73.7%）が第二局面でも賛否をまったく変えなかったという点は、特筆に値するだろう。全体で見れば、被験者の72.7%が、ネット言論との接触を経て賛否を変えたのだから、0値選択者の73.7%が賛否を変えなかったという事態は異常性を感じさせるに充分である。この点からすると、ネット言論の圧力は、賛否に一定のマイナス圧力を万遍なく加えるというよりは、プラス値の意見をゼロポイントに向かわせるように重点的に働く、偏りを持った圧力としてイメージした方が適切なのかもしれない。

II-2. 新聞/ネット言論に対する各種評価の変化

II-2-1. 〈母子加算復活賛否の変化〉と各種評価の変化との相関

新聞とネット言論に対する評価については、既述のとおり私が〈信頼性〉〈意見代弁性〉〈難易度〉〈責任感〉〈自主思考貢献性〉という5つの規準を設定し、被験者に評価してもらった。こうした評価も、ネット言論との接触を経た第二局面で様々な変化を示したが、母子加算復活賛否の変化との連動・相関がまったく見えない結果が多く生じた。元より、「相関の低さ」は予想しており、それを明示できればよいという面もあったのだが、賛否変化との相関がまったく見えないデータを詳細に紹介していく意義は本稿では低いだろう。したがって、まず母子加算復活賛否評価と、各種評価の変化との相関を見渡し、以降で提示していくデータを

表2. 〈母子加算復活賛否の変化〉と新聞に対する各種評価の変化との相関係数

	新聞信頼性評価の変化	新聞意見代弁性評価の変化	新聞難易度評価の変化	新聞責任感評価の変化	新聞自主思考貢献評価の変化
母子加算復活賛否の変化	0.15 相関無し	0.21 弱い正の相関	0.24 弱い正の相関	0.14 相関無し	0.13 相関無し

ネット言論のインパクト

表3. 〈母子加算復活賛否の変化〉とネット言論に対する各種評価の変化との相関係数

	ネット言論信頼性 評価の変化	ネット言論意見代 弁性評価の変化	ネット言論難易度 評価の変化	ネット言論責任感 評価の変化	ネット言論自主思考 貢献評価の変化
母子加算復活賛否 の変化	-0.21 弱い負の相関	-0.08 相関無し	-0.06 相関無し	0.03 相関無し	-0.10 相関無し

限定したいと思う。

このように、母子加算復活に関する賛否意見の変化と、言論に対する各種評価の変化との相関はいずれも低く、「相関が有る/無い」の慣習的閾値である0.2、-0.2を超えた項目が、かろうじて3つ見られただけだった。“母子加算復活に関する賛否を大きく変えても、新聞/ネット言論に対する評価はそれほど変えられない”というケースが多かったことが窺える。弱いながらも相関が認定されたのは、模式化して表現すれば、おおよそ以下のような関係である。“母子加算賛成を減らした程度と、新聞が多数意見を代弁しているという評価を減らした程度が、若干連動している”（弱い正の相関）、“母子加算賛成を減らした程度と、新聞記事はわかりやすいという評価を減らした程度が、若干連動している”（弱い正の相関）、そして、“母子加算賛成を減らした程度と、ネット言論の信頼性評価を上げた程度が、若干連動している”（弱い負の相関）、以上3項目である。

したがって以下では、母子加算復活賛否の変化と、何らかの側面で若干の関連を有していそうな3項目、すなわち〈信頼性評価〉〈意見代弁性評価〉〈難易度評価〉に限って、実験で得られたデータを提示していくことにする。

なお、これ以降は、母子加算復活賛否の変化を見た場合と同様に、実験の第一局面での各種評価を〈評価Ⅰ〉、ネット言論との接触後の、第二局面での評価を〈評価Ⅱ〉と表記する。これも簡略化のための便宜的措置である。

Ⅱ-2-1. 信頼性評価の変化

「信頼性評価」とは、既述のとおり、新聞/ネット言論の信頼性に関して「信頼できる～どちらとも言えない～信頼できない」という総合的な信頼性評価を、「100～0～-100」という数値で表した結果である。

表4. 新聞信頼性評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈新聞信頼性評価Ⅰ〉	120	37.1	70.8%	19.2%	10%
〈新聞信頼性評価Ⅱ〉	120	14.6	47.5%	34.2%	18.3%

回答が判別できない例がⅠとⅡ双方に一つずつあり、有効回答数は120となった。新聞の信頼性評価の平均値は、37.1から14.6へ、22.5ポイント低下している。実験の第二局面では、新聞記事の新たな提示はなかったのだから、ネット言論の各主張を読んだ結果として、新聞を信頼する気持ちは半分以下（2.5分の1程度）に弱められたことになる。23.3%の被験者が新聞の信頼性に対するプラス評価を撤回したが、マイナス評価の増加は8.3%に留まっている。母子加算復活賛否の変化ほどではないが、ここでも「どちらとも言えない」の0ポイントが、相対的に強い吸着力を示しているのである。

表5. ネット言論信頼性評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈ネット言論信頼性評価Ⅰ〉	119	-34.1	5.9%	27.7%	66.4%
〈ネット言論信頼性評価Ⅱ〉	118	-18.5	22.0%	29.7%	48.3%

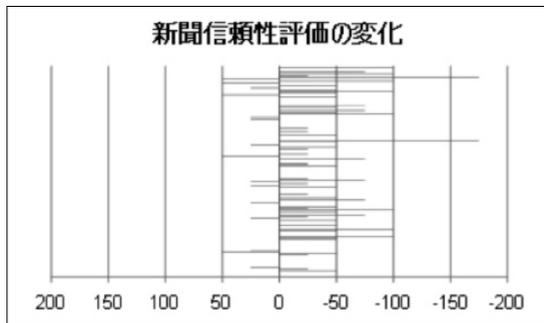
判別不能回答が2および3あった。ネット言論との接触によって、ネット言論信頼性評価の平均値は、-34.1から-18.5へ、15.6ポイント上昇している。「信頼できない」から、「やや信頼できない」に昇格した、といったところだろうか。しかし第二局面で上がったネット言論信頼性評価ですら平均値は-18.5ポイントに過ぎないのに対し、第二局面で大幅に下がった新聞信頼性評価の平均値は+14.6であり、なお大きな差がある。ネット言論の鮮烈なインパクトにもかかわらず、“新聞は信頼できる、ネット言論は信頼できない”という評価は大筋において、存続していると言えるだろう。但し被験者を個別的に見るなら、変化を過小評価すべきでないことも指摘できるかもしれない。ネット言論に対して、多少なりとも信頼できるというプラス評価を下した被験者は、5.9%から22.0%に上昇している。実数で言えば、7名から26名への増加だ。更に、実験の第二局面で、新

ネット言論のインパクト

聞に対する信頼性評価値より、ネット言論に対する信頼性評価値の方が高くなっている、評価逆転被験者が17名存在するのである。

ネット言論との接触によって、ネット言論に対する信頼性評価のバラツキが大きくなり、平均値には表れにくい両極化傾向が進んだのではないかと想定される。ちなみに、〈ネット言論信頼性評価Ⅰ〉の119名分データの標準偏差は43.4、対して〈ネット言論信頼性評価Ⅱ〉118名分データの標準偏差は49.0に上昇し、データのバラツキの若干の増加を示している。

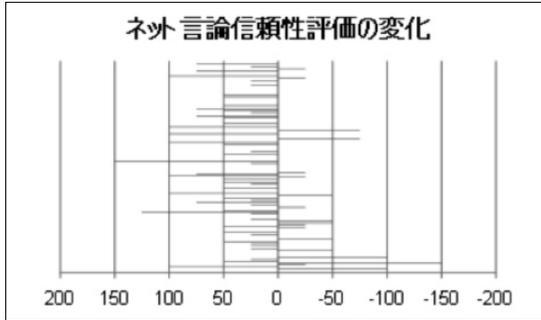
グラフ3と同様にⅠ→Ⅱの差を横棒で表す変化グラフを作成すると、下記のようなグラフ4とグラフ5が得られる。



グラフ4.

第二局面では新聞報道に批判的な傾向が強いネット言論が提示されただけで、新たな新聞記事の提示などは行われていないにもかかわらず、新聞に対する評価を逆に上げた、左方向に伸びる横棒を持つ一部被験者の存在が興味深い。しかしこうした反発は新聞信頼性評価に関してはそれほど強くはない（最大で50ポイント止まりである）。

対してグラフ5を見ると、ネット言論に対する信頼性評価の変化には、大きなバラツキがあることが見て取れるだろう。標準偏差で見ると、「新聞信頼性評価の変化」データは41.5、「ネット言論信頼性評価の変化」データでは45.8で、若干後者の方がバラツキが大きいという結果が出た。後に見るように、おそらく多くの被験者は、ネット言論の実例に数多く接して、“言われているほど、ネット言論の主張もメチャクチャではない”と考え、「信頼できない」という不信度を減らす



グラフ5.

方向に評価を変えたのだろう。しかし他の一部の被験者は、ネット言論との接触を経て不信を強め、ネット言論の信頼性評価を減じる、真逆方向に動いた。新聞信頼性評価における反発と同様、この反発に関しても、一部の被験者にこうした逆行動をもたらす要因は何なのかは、興味深い問題である。新聞に対する信頼を失う動き、ネット言論に対する信頼を増す動きに、反発を感じるようなバランス感覚や、従来の信念体系との不協和を減らそうと図る「保守性」を強く持つ者がいるということなのかもしれないが、いずれにせよ、ここで答えを確定することはできない。なお、「新聞信頼性評価の変化」のデータと「ネット言論信頼性評価の変化」のデータとの相関係数は -0.199 で、慣習に従って「弱い負の相関がある」とするには、最小値である 0.001 足りなかった。

II-2-3. 意見代弁性評価の変化

「多数の人の意見を反映している/少数意見しか反映していない」という意見代弁性について、被験者の評価がどう変化したかを見る。一部の被験者は、意見代弁性の評価に困難を感じたかもしれない。ネット言論は不特定多数の人々の、自由な書き込みから構成されているのだから、その混乱ぶりも含めて、この上なく「多数の人の意見を反映している」のは間違いない、といった考え方が可能だろう。他方、ネット言論を危険視する人々からは、逆の考えが表明・強調されてきた。すなわち、ネット言論ではしばしば、一般市民の常識・良識に著しく反する、極端に歪んだ考えが横行するのだから、耳を傾けるべきではない、といった考え方である。逆に新聞の言論についても同様の不確定性が指摘できるだろう。

ネット言論のインパクト

ネット言論を危険視する人々の考えに従えば、新聞の方が市民の常識・良識に即した言論を展開していて、ネット言論よりも遥かに意見代弁性が大きい、ということになりそうである。しかしもちろん、この考え方に対する批判・反対意見を想像することもたやすい。

結局、一見単純に思える「意見代弁性」の評価にも、こうした多義性・ゆらぎが持ち込まれる可能性は排除できず、その場合にはその都度妥当だろうと感じられた「落とし所」を、被験者各自が選び取る、という形で回答されるしかないようである。そこではしばしば、「自分の意見を新聞/ネット言論はどの程度代弁しているか」で意見代弁性を測る、自己本位的な判定法も援用されるであろう。逆に言えば、自分の意見と異なることを強調したい被験者は、この値を低く評価するかもしれない、ということでもある。もちろん、「多数意見を代弁しているから」といって、それが正しい意見だとは限らない」わけだが、自己本位的な判定が援用されるならば、意見代弁性が信頼性や正しさと同一視されることも起こる（実際、「新聞信頼性評価の変化」のデータと、「新聞意見代弁性評価の変化」データの相関係数は0.33で、他の諸相関よりは高めだった）。我々はここでは、部分的にはかなりデリケートな選択結果を見て、参考にしようとしているのかもしれないという点には、注意が必要であろう。

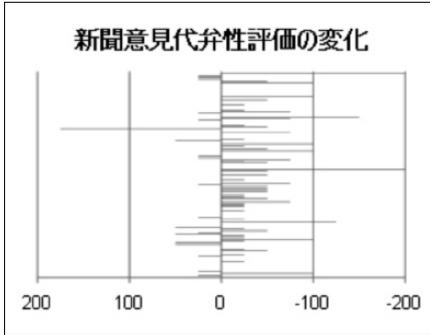
表6. 新聞意見代弁性評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈新聞意見代弁性評価Ⅰ〉	119	-4.0	31.9%	31.9%	36.1%
〈新聞意見代弁性評価Ⅱ〉	121	-22.9	20.7%	22.3%	57.0%

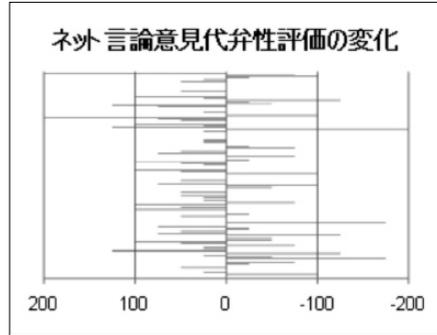
表7. ネット言論意見代弁性評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈ネット言論意見代弁性評価Ⅰ〉	118	8.9	54.2%	13.6%	32.2%
〈ネット言論意見代弁性評価Ⅱ〉	120	15.4	55.0%	15.0%	30.0%

この「意見代弁性評価」は、第一局面から既に、ネット言論に対する評価平均値(8.9)が新聞に対するそれ(-4.0)を上回っていたという点で、特徴的な指標だった。つまりネットの「偏向」を強調する意見も多く流布されている中で、



グラフ6.



グラフ7.

「多くの人々の意見を反映している」という性質は、ネット言論の方が強く持っている、全体的には被験者は評価していたことになる。しかしこの評価の変化方向や変化度合いに目を向ければ、ここにも特異性は感じられない。他の評価と同様、この意見代弁性評価でも、全体を平均的に見渡すと、ネット言論との接触後、被験者の中で新聞の評価が下がり、ネット言論に対する評価が若干上がるという現象が繰り返されたのである。そして信頼性評価の変化グラフの場合と同様、この意見代弁性評価の変化でも、新聞に対する評価の変化に比べて、ネット言論に対する評価の変化はバラツキが大きく、多数派の動きに逆行する「反発」の度合いも大きいように感じられる。標準偏差でみると、「新聞意見代弁性評価の変化」データは47.7であるのに対して、「ネット言論意見代弁性評価の変化」データは67.3であり、バラツキの大きさが顕著であった。

Ⅱ-2-4. 難易度評価の変化

意見代弁性などと同じく、「わかりやすさ」もまた、本来「正しさ」などとはまったく別個の評価規準である。しかし実際にはこの規準も時に「わかりやすさ≒共感のしやすさ」、「わかりにくさ≒共感にくさ」と捉えられ、説得力の評価に似た値を取ることがあると思われる。そこでこの難易度評価の変化からにも、言論評価のデリケートな多面性が紛れ込むことになるかもしれない。実験を通じて得られたデータは下記のようなものであった。

ネット言論のインパクト

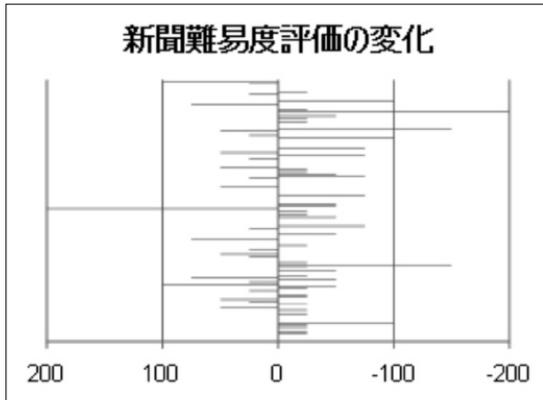
表8. 新聞難易度評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈新聞難易度評価Ⅰ〉	120	40.6	72.5%	12.5%	15.0%
〈新聞難易度評価Ⅱ〉	121	33.1	68.6%	15.7%	15.7%

表9. ネット言論難易度評価の基本数値

	有効回答数	平均値	プラス評価	0	マイナス評価
〈ネット言論難易度評価Ⅰ〉	118	37.5	68.6%	18.6%	12.7%
〈ネット言論難易度評価Ⅱ〉	120	44.4	71.7%	21.7%	6.7%

評価の各変化を横棒グラフ化すると、以下になる。

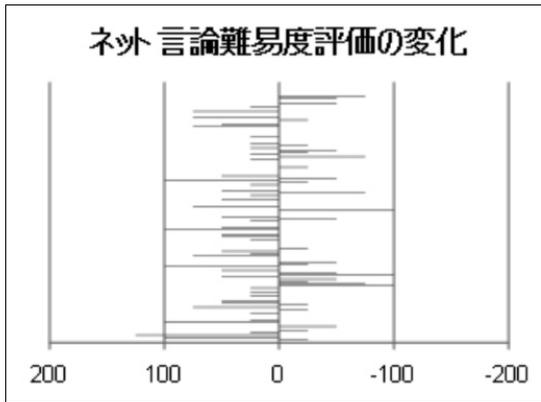


グラフ8.

新聞に対する難易度評価は、表8で見る限り、かなり小さく控えめな変化しか示していないように思えた。しかしグラフ8を見ると、印象は一変する。多くの被験者がマイナス方向に評価を変え、一部の被験者は-100を超える、かなり極端な評価変更を見せている。他方で、プラス方向への評価変更をした被験者もある程度存在し、やはり100以上の、極端な評価変更さえ若干見られる。この逆方向へ向かう動きが相殺され、「小さく控えめな変化」の外観が生じていたのである。

しかし「新聞のわかりやすさ」の総合的評価という、本来短期間でそうそう変わるとは思えない判断が、なぜこのような大きな動きを見せたのか。評価をマイ

ナスに変えた動きに関して、私がすぐ思いつくことができる仮説は、ネット言論との接触によって、「新聞記事の隠された意図」といった物に敏感になった被験者が、“新聞は見かけほどわかりやすすくない。読者を誘導しようという意図を、隠し持っていたりするのだ”という風に、「新聞のわかりやすさ」評価を変えた、というものである。プラス方向への極端な評価変更は、一部被験者の、ネット言論に対する（あるいは面倒臭い実験に対する）感情的な反発の表出か何かだろうか…もちろん、いかなる仮説もここで検証することはできないのだが。



グラフ9.

なお、難易度評価の変化に関して標準偏差をみると、新聞は47.9、ネット言論は43.1で、これまで見てきた他の評価とは逆に、新聞に対する評価の変化の方が、ネット言論に対するそれより、バラツキが大きい、という結果が出た。被験者たちの中で「新聞のわかりやすさ」というものがどんな含意を負わされているのか、興味深いところである。

II-3. 実験結果の要点

以上、実験から得られたデータの一部を提示してきた。要点をまとめておこう。

- ・ ネット言論との接触によって、被験者の72.7%が母子加算復活に対する賛否判断を変えた。判断を変えた者全員が、賛意を減らす、マイナス方向へ意見を変え、

例外は存在しなかった。全体的に見ると、第一局面で得た賛同を、第二局面で新聞はほぼすべて失った。「どちらとも言えない」という中立ラインを選択する被験者が大幅に増え、最大100の賛否値平均で50近くに達していた賛同が、ネット言論のインパクトを経て、ほぼ0へと収束したのである。但し賛意の減り方に比べると、反意の増え方は小さい。ネット言論のインパクトは、反意を掻き立てるといよりは、賛意を失わせ、被験者達を中立ラインに向かわせるような効果を強く示したように思われる。

・ネット言論との接触で生じたインパクトは、新聞/ネット言論に対する各種評価にも、様々な変化をもたらした。しかしその影響には、母子加算復活賛否への影響に見られた一方向性・斉一性は見られず、多方向的であり、新聞評価を上げる者、下げる者、ネット言論評価を上げる者、下げる者、夫々を生んだ。全体を均してみると、新聞に対する評価が下がり、ネット言論に対する評価が若干上がるという結果を生んでいるのだが、被験者個々の評価変動を見ると、変化の方向性が定まらず、カオスが出現しているという印象を抱かざるをえなくなる。したがって、母子加算復活賛否の変化と、各言論に対する各種評価の変化との相関は認められないか、認められる場合でも「弱い」と評価された。要するに、母子加算に関する賛否を大きく変えた者は、新聞やネット言論に対する各種評価も大きく変えた、といった連動傾向はあまり見い出されなかったのである。

・したがってこの実験から、既述した一つの謎の存在が確認されると言えるだろう。すなわち、被験者達は、「極めて無責任で、信頼できない」と評価している^{【※注9】} ネット言論に接すると、顕著な影響を受け、「極めて責任感が強く、かなり信頼できる」と評していた新聞への強い賛同をまるまる放棄し、更には全体的には新聞への相対評価を下げるという反応まで示した。ここに見られる評価と実際の影響力の乖離は、どのように可能だったのか？ 「信頼していない」のに、ネット言論の影響をなぜ回避・拒絶しない（できない）のか？

いったいネット言論のインパクトは、不信感を抱いている被験者達に、どうやって作用を及ぼし、彼らをどう変えたのか？

こうして我々は、実験結果を踏まえた上で、第一章で提示した謎へと再び行き着いたのである。次いでその解明へと歩を進めよう。

Ⅲ. ネット言論の基本特性

一見したところ、不可解に感じられるネット言論の影響力を理解するためには、ここでまず、その特殊性について再確認しておくことが必要だと思われる。我々のネット言論というものに対する理解不足が、その影響力を不可解に感じさせているのかもしれないからだ。

そこでまず改めて、次のような素朴な問いを立ててみたい。「マスコミが発信する言論と、ネット言論との重要な違いは何のだろうか」。

…特定の管理者によって統制され、選ばれた少数者のみが発言を許される場というものがある。どの程度制度化されているかは別にして、実質的には特定の権威づけられた選者（編集者）によって審査が行われ、発言資格の有無、掲載の可否が決められる、といったメディアであり、新聞・ラジオ・テレビといったマスメディアや、学術研究誌などは多くがこれに当たるだろう。メディア・その管理者・選者が負う権威が、発言者にも伝染し、「その場で発言権を認められた言論である」ということで、言論そのものまでが一定の権威を帯びる。このような場で発信される言論に名前をつけるとするなら、「エリート言論」という名がふさわしいように思われる。不特定多数の者の参加・発言が可能となっているという点が、ネット言論の特殊性の大元になっているという見立てが正しいなら（私はそう思うが）、「ネット言論」の実質上の対立概念は、「エリート言論」だと捉えることが可能だろう。

Ⅲ-1. 権威主義の排除

この対比の下で考えるならば、ネット言論の特性は一層見え易くなるように思われる。ネット言論では言説が事前に権威を纏わない。文字入力と簡単なブラウザ操作さえできれば、多くの場合誰でも投稿できるのだから、投稿者や投稿が権威づけられないのは当然なのだ。エリート言論では多用される「〇〇大学教授」「××研究所主席研究員」「弁護士」「株式会社△△代表取締役」等々の肩書も通用しない。もし投稿者が望めば、匿名のネット言論の場にも自らの肩書を書き込み、「秘密の暴露」によってその肩書情報の信憑性をも示せるかもしれない。そしてその肩書呈示が、閲覧者たちにとって有用な専門情報が提供される前触れであった

ならば、その投稿は歓迎されうる。しかしたんに投稿者やその投稿を権威づけるための肩書呈示だったならば、そうはいかないだろう。温厚な少数交流の場なら親切な投稿者からやんわりとたしなめられるだけで済むかも知れないが、辛辣な匿名掲示板などなら、良くて閲覧者たちからの徹底した無視の対象、普通なら激しい侮蔑・侮辱の対象とされるだろう。書き込まれた肩書や氏名に、ネットユーザーたちの興味をそそる特別なバリューが含まれていた場合には、その投稿は面白がられ、晒し者にされ、質問やからかいが殺到するかもしれないが、その場合でもその肩書投稿者は、もはや他の投稿者たちと同等の立場で議論に参加する資格—言わば「ネット市民権」のようなもの—は失ったものと見なされるだろう。

ここから判ることは、肩書呈示がなされないのは、「肩書を示しても、その真正性を保証する権威が存在しないので、それが本当だと証明することは難しく、意味がない」という、消極的な理由にのみ拠るのではなさそうだと、ということである。ネット言論は権威づけのための肩書呈示を実質的には排斥するような慣行を有しており、それによってネット言論は、「外的な権威に依らず、議論する」という自らの特質を自衛しているのである。ネット言論のこうした志向が現れるのは、権威づけられた肩書の排斥だけではない。エリート言論で多用される「権威の引用」戦術も、ネットではうまく機能しないことが多い。「権威の引用」戦術とは、「○○大学教授××によれば…」 「フランスの現代思想家△△が述べたように…」といった類の引用で、自らの言説に纏わせる権威を更に追加し、批判からの自己防衛強化を図る行動である。ネットではこのような回りくどい言説は、しばしば容赦ない排斥の対象となる。著名な知識人への言及で自らの投稿に権威の重みを持たせても、「長すぎる。3行でまとめろ」「要点を言え。やり直し」…といった、簡潔で容赦ないレスポンスが続き、「権威の引用」戦術はいとも簡単に挫折させられる場合が多いのである。

そうした特徴から言えば、ネット言論は「非権威主義」であるのみならず、しばしば「反権威主義的」でもある。権威主義の排斥で、ネット言論は「ここではその発言の中身でのみ評価される。タテマエはいらないし、実社会での権威も機能しない。自分の考え、自分の発見を実直に語れ。それだけで勝負しろ」という基本ルールを掲げ、自らの言論の特質を守っているように見える。

もちろん、匿名掲示板などでも、投稿時にシステムによって自動的に割り振ら

れるハンドルネームを用いず、自らが選んだ同じハンドルネームを独占的に使用する投稿者が現れることがある（「固定ハンドルネーム」略して「コテハン」と呼ばれた人々）。彼らはしばしば当該掲示板内での有名人あるいは人気者だったりするし、その掲示板内で有用な専門知識を豊富に備えていることで、ベテラン投稿者達から、敬意を集めている場合もある。したがって「コテハン」の一部は、一定の権威のようなものを纏い始めるかもしれない。しかし彼らがその地位を築いたのは、ひとえに共感や支持や笑い、感謝を集める投稿の積み重ねによってであって、外的な権威の援用やエリート達の支持によってではない。実社会での権威はここでは機能しないし、ここでの権威は実社会では通用しない、その原則は貫かれているのである。そこに何がしかの権威が成立するとしても、その気になれば誰もが使用できるハンドルネームによってのみ同定される、儚いかりそめの権威なのであり、コテハン達自身もそれを知った上で、匿名掲示板にそれ以上を求めることもないのだ。

Ⅲ-2. 敵対行動における斉一性

かつて私は、匿名掲示板群である「2ちゃんねる」で、「日本は核武装すべきか否か」という問題を人々が論じ合う地味な現場を閲覧したことがある。核武装賛成派、反対派、中間派の3派に分かれて、夫々が自らの考えを表明・説明し、他派の見解への懸念なども語りあっていた。賛成派に多い意見は、“核兵器を日本に向けている国がある以上、抑止力保持は国家としての責任であり、当然必要。しかし米国の核に抑止力を依存している限り、日本は自らの主権・生存権を米国に預け、米国が裏切らないよう、祈るしかないことになる。こんな無責任で危険で依存的な安全保障態勢は、当然変えた方が良い”といったもの。それに対して反対派に多い意見は、“核武装のコストは途方もなく高い。たんに核兵器自体及び運搬手段の開発・製造・配備運用・維持管理に莫大な金がかかるというだけではない。日本の核武装を妨害するために他国が仕掛けてくるであろう経済制裁等の圧力でも、日本は莫大な不利益を被らざるをえなくなるだろう。核武装は、下手をしたら世界を敵に回す、危険な賭けとなる。米国を利用する中途半端な現状が、実は一番利口な選択なのではないか”といったもの。他方、私が「中間派」に分類した考え方は、賛成・反対両派の理を認めつつ、“当面は米国依存を続けるが、

核武装能力の維持・更新は怠らず、「必要とあらば、日本はいつでも核武装できる」という事実と認識を、内外に周知させる”といったもの。当時の「2ちゃんねる」の政治的な議論が行われるスレッドでは、「2ちゃんねる」に多い政治的志向に極端な敵意を抱く投稿者が「荒らし」として乱入するのが常であったのだが、この核武装論議スレッドでは、なぜかそれが無く、「議論を楽しむ」「異論の考え方を知って勉強する」といった雰囲気の中で、穏やかに議論が続いていたのが印象的だった。

このスレッドでは、「2ちゃんねらー」と呼ばれた2ちゃんねるのコアなユーザーの内にも、色々異なる意見が並存していることが明示されていたわけだが、他方、これら2ちゃんねらーたちの意見は、実用主義的で戦略的な地盤の上での狭い分布に過ぎないとも言えるだろう。2ちゃんねらー達の間では、「核武装の是非など、論じようとするだけでも許しがたい背徳行為である」といった考えは見られず、“余程のことが無い限り、核武装の主張が日本の国会で多数派を形成するとは思えないし、それがいい事か否かは意見が分かれるが、核武装の是非を巡って国会で議論が起こるようになるだけでも、[「日本を刺激しすぎると、核武装賛成派が勢力を伸ばすかもしれない」という懸念が他国に強まって] 他国の横暴に対する抑止力になるから、望ましいのではないか”といった意見が多くの賛同を得る状況だった。つまり、「核兵器は絶対的な悪であり、日本はその悪に染まってはならない」「唯一の被爆国として、日本は、核廃絶を世界に訴え続けるという人類史上の崇高な使命を負っているのだ」とかいった、純倫理的ないし宗教的な信念は、そのスレッドで地位を得ることはなかったのである。「革新勢力」によるこれら純倫理的・宗教的信念の利用は、「2ちゃんねらー」たちの間では嫌悪の対象となっていたので、2ちゃんねらーの内輪の議論に登場しなかったのも当然である。

そして実際、「九条教」^[*注10]などの新たな動向を話題に上げるスレッドなどが立てられたりすれば、2ちゃんねらー達は核武装賛成派も反対派も中間派も一こぞって嘲笑や揶揄に邁進することになっただろう。この変化は、多数の群れで暮らす昆虫や小鳥などの生態と比べることで捉えやすくなるかもしれない。平和な折にはてんでバラバラに行動したり、喧嘩したり、あるいはサボったりしている、「数多くの個体」にしか見えない虫や小鳥たちも、敵が姿を現せば様相を一変

させる。彼らは一挙に驚くべき斉一性を発現させ、巨大なアメーバのように変形する黒いかたまりとなって、集団防衛の意志の権化と化するのである。この様相しか知らない観察者は、群れの中の個体は無個性・無葛藤で、一様に機械的な反応を示すだけの要素だと考えるかもしれないが、その認識は単純化が過ぎる。2ちゃんねらーに関して言えば、暇な折には内輪の議論に興じて楽しめるだけの多様性やゆとりを有しているのだが、「共通の敵」が現れた場合の攻撃的祝祭の高揚・一体感はまったく別の、鮮烈な快樂をもたらしたのである。

そして後に実験資料から見るように、この「攻撃行動における斉一性」と、次に述べる「視点の多様性」との共存が、ネット言論の不可解なまでの影響力を生み出す基盤の一つになっているのだと思われる。

Ⅲ-3. エリート言論のコスモス/ネット言論のカオス

「エリート言論」はメディアの管理者によって選別され統制された言論であり、この選別・統制によってメディアの権威の、個々の言論への分与も可能になっている。朝日新聞に掲載される言論は、記者による報道や論説はもちろん、社外の権威者からの寄稿や、一般読者からの意見投稿に至るまで、「朝日新聞らしさ」を発揮するのが普通である。この点は、賛否を別にすれば、多くの人の同意を得られるであろう。朝日新聞は、記者や寄稿者・一般読者を総動員して、「朝日新聞を作る」のだ。

個々の投稿者が、自らの主張に「都合が悪い」事実や主張を無視しがちだという点は、ネット言論・エリート言論を問わず、一般的に指摘されうる傾向であろう。ネット言論では端的に自分の考えを表明することが優先され、それを正当化したり説明したりするために長々と論じることは読者に忌避される傾向が著しいので、異論の無視はエリート言論よりも起こりやすいと言える。しかしそれでも、メディア管理者による計画的な情報統制が個々の言論を超えた範囲に広がっている点は、ネット言論には滅多に見られない、エリート言論の特質であろう。ネット言論の斉一性は、「共通の敵」が姿を現した際の反応であって、トピックに依存している。例えば「2ちゃんねる」で「祭り」^[※注11]が盛り上がった際にも、それは特定のスレッドを「祭り会場」とした出来事であり、「2ちゃんねる」全体が「祭る」わけではないのだ。その上、多数派2ちゃんねらーが祭りで盛り上がる際

には、「アンチ2ちゃんねらー」たちもその妨害のために「祭り会場」に入り、論題とは無関係な「ネトウヨ」に対する誹謗や侮辱を書き込んだり、無意味な定型文の連続投稿を行うのが常であった。多数派2ちゃんねらーたちはこうした妨害工作を「燃料投下」と呼んでいたが、それはこうした「アンチ」による妨害工作で、スレッドの消費が加速され、祭りの規模が否応なく拡大するからである（「祭り」の大きさは、一定期間内に同一トピックを論じるスレッドが何個立てられたかで測られた）。2ちゃんねらー達の斉一性が最大限発揮される機会できえ、対立や混乱は排除されなかったのである。

能動的な思考力や、豊かな世間知を欠いた読者なら、実験資料①-1に使った毎日新聞記事を読んでも、異論の可能性さえ思いつけないかもしれない。実際、私が行った実験でも、母子加算復活に100%の賛同を示した上で、「そのような意見を抱いた理由」の記述を求められると、“困っている人を助けるのに、理由なんていない”とだけ記した被験者がいた。その人物は異論などありえない完璧な世界の中にいるし、その世界が毎日新聞が作った虚像ではなどと疑う心も一切持っていないのであろう。それに対して、その新聞記事をめぐって展開されたネット言論は、まったくの別世界を現出させる。毎日新聞はネットの言い分を伝えることはないが、ネット言論はマスコミの言い分を最初に伝え、それから反攻を開始する。ネット言論は常に、対立と異論と混沌から生まれ出るのである。

こうして、しばしばエリート言論は、整合的な「秩序立った宇宙」の様相を呈し、ネット言論は矛盾や対立が渦巻く「混乱した宇宙」の様相を呈する。このように叙述すると、エリート言論の方が、ネット言論よりも遥かに強い影響力を有すると思われるかもしれない。エリート言論が有する、「報道しない自由」、すなわち都合の悪い情報を隠しおおせる統制力は、この上なく強力な武器になると考えられるからである。しかしそう言えるのは、大衆が都合の悪い情報と接触するのをエリート言論が完全に制止できる、ユートピアで暮らす場合だけだ。この制止がひとたび破られ、例えばネット言論との接触が起こると、大衆はこれまで隠されてきた「都合の悪い」情報に一拳に晒され、これまで見てきたコスモスは、エリート言論が作り上げた虚構であったと認識することになる。そうした接触者の一部はカオスに困惑し、もはや判断不能と考え、問題関心を撤回するだろうが、

別の一部はこのカオスとの接触を知的な解放と捉え、「自分を騙してきた」エリート言論への怒りを新たな知識吸収への動機にして、新状況を享受し始める。“困っている人を助けるのに、理由なんていない”という前述の満ち足りた記述とは対照的に、実験の第二局面では“自分もマスコミに騙されていたと感じ、腹が立った”といった類の記述さえも現れることになったのである。マスコミへの敵意を共有する「ネトウヨ」の多くも、そう生まれついたわけではなく、おそらく「自分もまんまと騙されていたのだ」という、解放に伴う怒りに満ちた発見から、生誕したのである。

Ⅲ-4. 視点の複数性・攻撃の多面性と「気づき」の共有

既述のように、ネット言論の斉一性は、「共通の敵」の動向を伝えるトピックとの関連で生じることが多い。左派、「リベラル派」、「九条教信者」などの話題が判りやすい例だろうが、少年法・少年犯罪・暴走族などの話題、そして生活保護の話題なども、ネット言論人に共通の反応を引き起こしがちなのである。この3つの話題は、実体的にある程度関連している。左派・リベラルは、少年犯罪への罰則強化に消極的で、「少年を犯罪に追いやる社会」に責任を帰属させて、持論である社会変革の必要性の訴えに結びつけようとする傾向が強い。また、弱者・少数者に目を向けて、その擁護者として振る舞うことを好むので、被生活保護者の受給の「権利」を守る代弁者・後援者として論陣を張ることが多い。左派を嫌い、少年犯罪に厳しく、生活保護の不正受給などに容赦がなく、疑り深い、という3つの傾向は、左派・リベラル派への反感を通じて、ある程度実体的な関連を有しているであろう。

したがって、左派マスメディアと見なされた新聞が、民主党・社民党・共産党などが主導した母子加算復活を援護するために書いた記事への、ネットの反応を記した資料②には、当然ながら斉一性が強く現れている。すなわち、母子加算復活の必要性を訴える受給者・マスコミ・左派への不信や批判が溢れていたのである。私が読んだ範囲（千件以上の投稿）では、斉一性に明確に抗った例は一つだけで、それは動画投稿サイトのコメント欄に投稿された、“底辺（ネトウヨ）が底辺（生活保護受給者）を攻撃する愚”を指摘する文章であった（当時社会学者の調査などを元に流布されていた、「ネット右翼＝社会の底辺」という図式的認識を

利用した「ネトウヨ」攻撃であり、母子加算報道に関わる意見はまったく含まれていなかったのも、私は資料②に採用しなかったが。

しかしこうした顕著な「斉一性」は、視点の多様性や攻撃の多面性と同時に成立している。後ほど資料②を使って具体的に見るように、或る投稿者はメディアに登場した生活保護受給者の浪費や金銭感覚を具体的・個別的に問題視し、別の投稿者はより切実と感じられた困窮者に言及して、寿司の的外食を生存権として要求するような主張への違和感を吐露し、また別の投稿者は“民主党を選挙で勝たせるために過剰に演出された報道をするマスコミの偏向ぶり”を批判する。…マスコミが強調しようとしている、記事に登場した受給者達の困窮を信じず、これら受給者にもマスコミにも疑いの目を向ける点は共通している。目を向ける先は同じなのだが、各人はどこから見ているのかという「視点」には、かなりのバラツキがあるのだ。

高みから世の中を見下ろし、俯瞰・指導するかのような発言が為されることが多いエリート言論に比べると、ネット言論の視点の多様性は際立っているが、こうした多様性には、「統一性・整合性の欠如」という欠点と共に。大きな利点も隠されているように思われる。単独の人間は、たとえ比較的注意深い人物であったとしても、せいぜい二つの視点からしか物を見ていないし、たとえ比較的博識な人物であったとしても、十分な知識を持たない、広大な「不得意分野」を抱えている。後に見るように、マスコミの記者たちは、「子供用の上履きは幾らくらいで買えるのか」「この女性の化粧品は幾らくらいするか」といった事柄について、おそらく無知だった。しかし他方、位置と得意分野において多様な視点が、自由なコミュニケーションのネットワークの中で生む言論では、この「二視点の制約」や「無知の不可侵領域」が、しばしば軽々と乗り越えられるのである。

例えば私が実験資料②に引用した、実験資料①-1の毎日新聞記事に対する投稿の一つは、こういうシンプルな内容だった。

「てか、復活しても貰えないじゃん 長男18ならもう駄目だろ」

最初の実験時に、この投稿を読んで「そっかー！」と感嘆の声を上げた被験者がいたので、自力では「18歳問題」を発見できなかった被験者は、こうした単純

な書き込みからも大きなインパクトを受ける可能性があることに気づいた。そこで私は、実験後の総括をする折に改めて、この問題に関して話すことにした。

私はまず、以下二つの既得情報を確認。

- ・「母子加算は18歳以下の子を養育するひとり親家庭に支給される」
- ・「実験資料①-1：毎日新聞の「2009/8/21 一票に願いを：09年衆院選/2 切実『母子加算復活を』 心むしばむ生活切り詰め（前半部抜粋）」に登場するのは母と一人息子の家庭であり、息子は記事が掲載された2009年8月時点で、既に18歳になっている。

そして、「故に①-1の毎日新聞記事が取り上げた母子家庭は、民主党政権が成立し母子加算が復活されることになっても、一年も経たない内にその受給資格を失い、月一で寿司三昧にふけるといふ生きがい再び失う」という、当然の推論が成り立つことを指摘した。

その上で、「ネットの書き込みを読む前に、この年齢問題に自力で気づけた人、手を挙げて」と要請してみたのである。挙手したのは、21名中、僅か2名だった。

その初実験以降、実験実施の度に同じ形で「18歳問題」を自力認識できた人数を確認し続けたのだが、結果に大差はなかった。挙手は最も多い年で4人、最も少ない年だと0人。つまりおおよその予測平均で言えば、20人中の18人ほど、被験者の90%程度は、与えられている情報を照らし合わせて、当然の結論を導く推論過程を、自力では遂行できず、新聞記事を読んだだけではこの重要な年齢問題の存在に、気づくことさえできなかつたと考えられるのである。

しかしひとたび「18歳問題」がネットへの投稿で指摘されれば、大多数の閲覧者の間で「18歳問題」の認識は一挙に共有されることになる。ネット言論との接触によって、迂闊で受動的な若者の群れも、「そっかー！」と一挙に気づきを得ることになるのだ。たとえ母子加算の年齢制限について知らない閲覧者がいたとしても、「長男18ならもう駄目」の一言で、「子が18歳以下」という制限があることを安々と察知できる。ネットワークで結ばれ、短いメッセージを高頻度でやり取りする多数の視点は、その多数性によって飛躍的に高められた発見能力をも、直ちに拡張・共有するのである。

他方、①-1の毎日新聞記事自体には、母子加算に「子が18歳以下」という制限が存することは明記されていない。同一世帯家族の人数と年齢にしても、「～さ

ん(46)は長男(18)と2人暮らし」という最低限の表記から判別できるだけで、そこに重大な問題が潜んでいることを窺わせる文言などはまったくない。したがってこの記事をいくら注意深く熟読しようとも、母子加算の年齢制限を知らない読者は、「18歳問題」の存在にいつまで経っても気づけないだろう。エリート言論では、大衆が知るべき情報が示され、大衆が従うべき誘導がなされるが、大衆が知るべきではない情報は隠されるか、軽視される。無知をも利用した誘導…良かれ悪しかれ、それがエリートによる「統制」の実態なのである。

したがって、ネット言論との接触で「18歳問題」に気づいた者の一部(おそらく能動的な知的活動を厭わない人々)は、新聞が単純かつ重大な年齢問題を隠蔽して、自分達をまんまと誘導したことに思い当たるし、明らかに母子加算復活を訴えるためのサンプルには適さない家庭を取り上げた新聞社の無能力あるいは怠慢あるいは読者軽視を、しばしば憤りを持って問題視していくことになるだろう。

Ⅲ-5. 自己同一性の欠如

エリート言論の単眼的・偏執的言説とは異なり、より分裂的なネット言論は、“或る認識を確立し、今度はその認識を前提に別の認識を導き出す”といった論理的構築の説得力によって全体的な影響力を生み出すわけではない。この違いを見てみよう。

シンプルで短い①-1の毎日新聞記事でさえ、「一票に願いを」と投票行動へ読者を誘導するにあたり、

イ) 母子にとっての寿司外食の重要性

ロ) 母子加算廃止と寿司外食取りやめとの関連づけ

ハ) 働けない事情の列挙・確認(乳癌後遺症、働けない罪悪感によるうつ病、高血圧)

二) 強調された困窮(就活スーツさえ買えない)

といった情報を布石として配置し、誘導に説得力を持たせていた。

加えて、

ホ) 記事を「心むしばむ生活切り詰め」という見出しの下に配することで、「母子加算廃止のせいで、追い詰められた母親が心の病になった」と読者が誤認しやすいように、ミスリーディングさえしている(周知のように、新聞読者はしばしば、

見出しから得られる予断に従って記事内容を判断し、詳細はよく読まずに済みます。新聞社の方もこの実態は知っているのだから、見出しを工夫して手っ取り早く読者を誘導する手法を多用するのである。

このように読者の同情を喚起して、都合が悪いかもしれない問題（息子の年齢や、うつ発病と母子加算廃止の無関係性、長男の定時制通学によって可能になるはずのバイト・就業の有無や、離婚した元夫の養育義務の行方等）は読者の関心の外に追いやることで、読者が母子加算復活を求め、衆院選で野党に投票するように、誘導しているのである。

このような論理的な配慮に基づく構築は、ネット言論では滅多に見られないし、見られても貧弱なものである。「三行でまとめろ」という、エリート言論人から見れば恐ろしく過酷な「三行ルール」が横行したネット言論では、自己正当化の言い訳を展開する余裕など、端から与えられなかったのだ。したがってネット言論人は、自己防衛の理論武装を固めるよりも、端的に敵の急所一つに狙いを定めた、捨て身の一撃を磨く。その方がネットでの賛同と喝采を得やすいからである。「てか、復活しても貰えないじゃん 長男18ならもう駄目だろ」…以上、私の渾身の反撃は終了。後は任せた、というわけだ。

したがってネット言論には、統率者や指導者が存在しないだけでなく、共通の根拠も論理的基盤もない。理解することは難しいかもしれないが、斉一性を発揮する攻撃行動の際にも、ネット言論は自己同一的ではないのである。電光掲示板を見ると我々は「動いていく文字」を知覚するが、実体的には、「動いていく文字」という自己同一物は存在せず、在るのは「点滅している無数の固定電球」である。これと同様、「動き」に同一性を見込む傾向を有するのは、我々の認知システムの性なのかもしれない。しかしこれは幻影でありうる。アンチの人々がネット言論の一主張を論破したところで、せいぜいが襲い来る数千・数万の内の1匹を潰しただけの話である。攻撃の勢いを変える影響力など、殆どゼロに等しい。しかし「襲い来る数千・数万の内の1匹」しか、叩ける対象は存在しないのである。

Ⅲ-6. 共有されやすい価値の重視・互酬的道德原則

言説の難解さが、「自分はこの難解な言説を理解できた」という知的優越感を賛

同者にもたらずので、理解できないことが自称理解者・追従者を増やす効果を持つ。ヴィルフред・パレートはマルクスの言説にこのような逆説的な効果を見出したが、難解さが際立つ諸思潮（例えばヘーゲルやハイデッカーやフッサール、フランス現代思想家たちの思想など）もかなり一般的に、この効果の恩恵に預かっているように思われる。

しかしネット言論では、このような知的エリート主義はうまく成長できない。情報や認識の素早い共有が自分たちの武器であると考えられている、反権威主義的ネットワークの中では、秘義主義者（選ばれた識者以外には理解困難な教えを信奉する者）が周囲から人気や信頼を得るのは難しいのだ。「どゆこと？ 無知な俺でもわかるように解説プリーズ」「3行に要約してくれ」などといった要求が横行する場では、滑稽な笑い者にならずに自分が得た秘義を開示すること自体、極めて困難だろう。

そして、知的エリート主義が成長しにくい環境では、別のものが成長する。ネット言論はこの面においても、反エリート主義的に振る舞うのである。“エリート主義的な秘義の伝授無しに、共有できる価値が、有用な価値＝真の価値”と発想されるのだ。かつてマルクス主義者は、大衆に「プロレタリアート」なる新奇な概念を教え、「国家などといった枠組みはもはや意味を成さない。自分は何よりもプロレタリアートなんだ」と考えるように人々を指導した。もちろん、なぜそう考えるべきなのかを説明する、独自の歴史像と難解な理論付きで。しかしネット言論では、こうした構築的な新規自己認定の学習・信奉を要求する思想を広めるのは難しい。結局そこでの大勢は、「日本人である」という、特別な下準備無しに共有される同一性を重視し、「日本人」として、日本人の利益や尊厳を守ることが、共有されうる目標と見定めることになった。それと同時に、日本人が伝統的に守ってきた、聖性を帯びたシンボルを再評価し尊重しようという機運も生まれ、伝統主義・保守主義が優勢な思潮が育った。過去や現在を打破・超克すべき障壁と見なし、それを乗り越えた未来の人間（言わば「脱日本人」ないし「超日本人」）を志向するような革新主義とは、対照的な思潮である^{〔※注12〕}。

この基本性格から、ネット言論の「敵」も定まる。日本や日本人に敵意・悪意を向けてくる人間は敵であり、善意や友情を向けてくる人は友と見なされる。「敵意には敵意を、善意には善意を返す」という、原始的な互酬性原則が、共有され

やすい大原則として通用するのである^{〔※注13〕}。

ネット言論に敵意を向ける人々はしばしば、その特徴を「国粹主義」とか「排外主義」といった概念で捉えてきた。しかし私見では、これはあまり適切ではない。東日本大震災一周年追悼式において、“当時の民主党政権が中国への気兼ねから台湾の代表者に指名献花の機会を与えなかった”とされる問題が提起された折など、怒りが渦巻いたのはマスコミではなくむしろ、ネット言論であった。台湾に対して「恩を仇で返す」仕打ちをした民主党政権の「不道德さ」が、ネットの怒りをかっただのである。東日本大震災関連で言えば、いち早く大規模な支援活動を開始した米軍に対する素朴な感謝が支配的だったのもネット言論の場であり、そこではやはり、「恩を仇で返す」ように社説で米軍の震災支援に対する懐疑や懸念を強調した、沖縄の新聞社などに対する怒りが渦巻いたのだ。

こうした例からも、ネット言論の主流的な態度を単純に「排外主義」「国粹主義」と捉えることは不適切であることは明らかだろう。(東日本大震災に対する義援金支出のトップ2とされた)米国や台湾に対しては、ネット言論はしばしば左派よりも親和的姿勢をとり、友情を示す。米軍基地周辺で「ヤンキー・ゴー・ホーム！」と金切り声を上げるのは「左派」であり、動画へのコメントでしばしばその狂信性を帯びた振る舞いに嫌悪感を示すのがネット言論なのである。敵味方を識別する重要な規準となるのは血統ではないし、国籍さえしばしば決定的な基準にはならない。重要なのは日本の達成や他の日本人に対する行動・態度・認識なのである。

もちろん、ネットの一部において中国、韓国、北朝鮮などを警戒し敵視する傾向が強く根付いてきたのは事実であるが、そうした現象も互酬性原則の例外ではない。これらの国・国民が、日本に強い敵意を抱いていると認識されているために、警戒や敵意も正当化されてきたからである。日本で多数の死者が出るような事故や災害が起こると、韓国や中国ではそれを祝い、被害の拡大を願う声がネット上に殺到する事態がしばしば生じる。すると今度は、そうした書き込みを邦訳して、我が国のネット上で逐一紹介するというネット言論人の広報活動が続く。このように、韓国や中国を敵視することを正当化する、「もっともらしさの構造 plausibility structure」^{〔※注14〕}をネット言論は有しており、機会ある毎にその敵意や警戒心を正当化・再活性化しているのである。

「私は日本人である」という認識をそのまま立脚点とし、「日本に敵意を向ける勢力は私の敵であり、善意を向ける勢力は私の友である」という互酬性原則に基づいて敵と味方を選別する。ネット言論ではこの極めて原始的でシンプルな思考や行動の様式が、原則として広く共有されている。左派のエリート言論人はかねてより、“国家と郷土は別である。国家の実体は人々を統治する仕組みにすぎず、その実体を離れた幻想に同一化して「日本人」と自己同定するのは愚かだ」といった類の型にはまった理屈で、こうした原則を突き崩そうとしてきたが、うまくいっていない。そうした理屈はあまりに一面的かつ回りくどいので、「でも外国が日本に核攻撃すれば、私や私の知人が死ぬ。故に私は自分を“日本人”と考える」という簡潔な反論を、無効化できないからである。

Ⅲ-7. 不必要なまでの攻撃性の誘示

ネット言論の特徴として目につきやすいものの一つは、他人とのリアルな交流場面ではまず発せられないであろう、極端な攻撃的言辞が横行する現象であろう。この現象は、言論の場の主催者（個人ブログにおけるブログ主など）による制御が乏しい、匿名掲示板などでは特に著しい。例えば、親しくない初心者にとちょっと調べれば判るような事柄を繰り返して質問され、煩わしくなったベテランがどう反応するか、想像してみよう。リアルな対面状況において、親しくない新参者に対するなら、どのような発言が典型であろうか。「ああ、ご質問の件はネットで検索した方が簡単に答えが見つかりますよ。グーグル検索してみてください」、といったところが穏当な対応だろうか。しかし上記のような場面が頻出するネット言論では、こうした場合のために、定型文があった。「ググレ、カス」、である。この決り文句の簡潔さは見事としか言いようがない。指示は「ググレ」の三文字で完成しているのに、更に二文字の罵りが追加されることで、「ああ、ご質問の件はネットで検索した方が簡単に答えが見つかりますよ…」という長たらしい発言でも隠されていた、発話者の苛立ちまでもが端的に表現されている。この苛立ちの表現追加によって、「検索ワードは何にしたらいいですか」といった追加質問を発しかねない、初心者の甘ったれた依存性がきっぱりと拒絶されているのである。おそらく苛立ったベテランの一人が、この情け容赦のない書き込みを行い、その完璧な簡潔性が他の閲覧者たちにウケて、流用され、常套句化していったのであ

ろう、と想像される。

こうした攻撃的表現の横行も、ネット関連でもよく使用される「リスク・シフト」（集団においては極端に走ったアイデアが注目を集めやすく、成員の個々の責任感も軽減されるために、危険な意見が賛同を得やすくなる、という現象）と同様の集団現象として、理解できるかもしれない。しかし、こうした容赦ない書き込みを日常的に行う投稿者たちもちろん、リアルな社交場面で他人を唐突に「ボケ」「カス」呼ばわりはしない。そのような攻撃性の発露は、発話者にささやかで、一瞬の爽快感を与えてくれるかもしれないが、リアルでもたらされうる代償の大きさに比べれば、その必要性はあまりにも小さい。リアルでないからこそ、容赦の無さを投稿者も閲覧者も面白がり、楽しんでいられるのである。

不要と判断して省略したケースも多いが、資料②に採用したネット言論の原典にも、「ボケ」、「カス」といった罵りを文末に追加した投稿が複数含まれていた。しかしこうした罵りの追加によって、（発話者の苛立ち表現以外に）主張に新たな意味が生まれるとは考えにくいし、ネット言論を読み慣れている読者ならば、こうした過激表現にも慣れすぎてしまって、感覚的なインパクトすら殆ど感じないだろう。しかしネット言論における、こうした「不必要なまでの攻撃性の誇示」に慣れていない読者ならば、話は別かもしれない。私が行った実験でも、記述式の回答において、ネット言論の「言い方のキツさ」や「毒（を含んだ表現）」に言及した被験者は複数存在した。ただしその言及の主旨は、大きく異なる。大別し再定式化するならば、以下のような二様の主旨があった。

- a. ネット言論は、言い方はキツイが、内容はなるほどと思われる指摘も多かった。
- b. ネット言論は、なるほどと思われる指摘もあったが、言い方がキツすぎると思った。

両主旨とも、“ネット言論は言い方がキツイ”、“納得できる指摘もある”、この二つの認識を示している点で共通である。しかし重点の置き方、影響の方向性は、明らかに逆を向いている。aはネット言論の（表現のキツさはさほど重視せず）内容には納得できたという結論を導こうとしているのに対し、bは（内容の説得力は重視せず）表現のキツさを問題として、それに反発する方向性を示しているよ

うに思われる。

ネット言論に不慣れな者が比較的多いと思われる、大学一年生では、攻撃性の誘示に接して、このように反応が二分されるのだとすると、ネット言論のこの特徴は、ネット言論人たちが思っているよりも大きなインパクトを若者に与え、一部の感情的な反発をもたらしているのかもしれない。つまり、ネット言論のインパクトを受けて、一部の（比較的少数の）被験者は、大勢とは逆に、マスコミの評価を上げたり、ネット言論の評価を下げたりする反応を示したが、こうした反応の一部は、ネット言論のキツさ。過酷さに対する感情的な反発に起因しているのかもしれない、ということである。

Ⅲ-8. 怒れる巨人と、笑うイナゴ

私見では、エリート言論とネット言論の間には、もう一つ、不気味な違いがある。基調となる情緒の違い、「ムード」の違いといったものである。エリート言論が正面切ってネット言論に戦いを挑むことは殆どないが、間接的な仕方で攻撃に近いものを仕掛けることはある。ネット言論の異常性や偏向性、憎悪、虚偽性などを強調し、関わりを持たないよう大衆を誘導する場合などだ。エリート言論人達のネット言論に対する怒り、憎悪、軽蔑などが、そこではしばしば露呈される。

ネット言論によるエリート言論に対する攻撃も、しばしば怒り、憎悪、軽蔑といった感情で動機づけられている。その点は同じことだろう。しかし大きな違いもある。ネット言論人がエリート言論を攻撃するのは、そうすることが「楽しいから」でもあるのだ。「マスゴミ」に対する、怒り・憎悪・軽蔑といったネガティブな感情を、それを共有する仲間たちとの共闘を通じて、ネット上のマスゴミ攻撃で発散する。そのイベントには、楽しく仲間と盛り上がるという、ポジティブな一面も備わっている。そしてこのポジティブな一面を更に強化するのが、ネット言論にしばしば見られる、ユーモアへの偏愛である。エリート言論がしばしば厳粛でしかめ面しい表情を一貫して保つのにに対し、ネット言論ではたとえ深刻ないし悲惨なトピックについて話し合われている際にすら、しばしば読者をクスリとさせるようなユーモラスな表現が持ち込まれるし、閲覧者たちもそれを許容する。タテマエの持ち込みを嫌い、ネットではホンネこそが語られるべきとしてき

た伝統が、「葬式に出るとつまらない事でも笑いがこみ上げてきて困る」といった、礼儀上抑制される人間の複雑性を、ネットでは許容しようという習慣を生んだのかもしれない。いずれにせよネット言論では、義憤と笑いといったものが、いとも容易に共存するのである（後述する「クソコラグランプリ」などを参照せよ）。

したがってエリート言論とネット言論との対立は、「現状を憂う、怒れる巨人」と、「怒りや敵意で巨人を襲いながら、同時に仲間との斉一行動で楽しく盛り上がっている、イナゴ達の群れ」との戦いのようなものだ。巨人は、巨大な自分に従おうせず、反抗してくる虫けらどもに怒り心頭だが、虫けらどもの方は、寄ってたかって巨人の傲慢さを「おちょくり」、あざ笑う行動を楽しんでもいる。その様子を見て巨人は怒りを募らせ、そんな巨人を見てイナゴどもは更に哄笑する。

IV. ネット言論の特性に即した実験結果の理解

IV-1. 資料②の視点別例示

以上指摘してきた、ネット言論の幾つかの特性を踏まえて、実験とその結果を再考していこう。

まず、資料②から、「視点」の特徴に添って幾つかの投稿論旨を抜粋・提示し、実験で引用されたネット言論をもう少し具体的な形で閲覧してみる（引用に際しては内容を過不足無く簡潔に伝えるために、論旨に即しながらも言い換えや要約を行っている。また [] 内は南による補足である）。もちろん、資料②は、ネット言論からの100件程度の抜粋であり、以下で紹介するのはそのごく一部の要約にすぎないが、母子加算問題におけるネット言論の大凡の雰囲気のようなものは、感じ取れるのではないだろうか。

a. 即事的・即物的な生活者視点からの投稿

[毎日新聞が取り上げた母子世帯Aに対して]

・ウチは回転寿司に行けば夫婦で18皿食って、「贅沢したな」と満足感に浸る。

二人で40皿なんて考えられない。

- ・二人で40枚以上食べられるって、普段から胃がでかくなってないと無理では。
- ・[ビールやサイドメニュー一切無しとしても] 一皿平均150円なら6000円、「ささやかな」贅沢とは言いにくいかな。3000円以下なら同情できたかも知れないが。
- ・金がないなら、自宅で手巻き寿司にしたらダメなの？ 子供もその方が喜ぶと思うが。
- ・40皿の寿司代のために、もっと税金まわせってこと？ どんな貴族階級なんだよ。
- ・長男まだ8歳か…ちょっと可哀想かなって思ったけど…18かよ!! 働けよ!!
- ・寿司は握り固めた米が主原料の、高カロリー食品だし、一々醤油もつけるから、塩分過多にもなる。高血圧の病人で15種類の薬を常用している人が、そんな物を大量摂取したらダメだろ。健康のためには、食べられなくなって良かったのでは。

[毎月22万程度の扶助・手当を得る一方でテレビで困窮を訴えた被保護母子世帯Bに対して]

- ・これって手取り22万に当たるわけで、サラリーマンなら28万くらいの総支給。年収380万クラス。しかも医療費・社保費・NHKは無料。家賃1万5千円でなぜやっていけない？
- ・手取り21万なんて、ウチより金持ちなのに、「常に赤字」って、どんな家計？
- ・“ウチは上履きも680円の安物しか買えない、普通は2千円する”なんて発言はおかしい。上履きは380円で買える。680円なら[ウチから見たら]高級品。
- ・電話代1万6千円、水道光熱費2万円って、どんな贅沢な暮らししてんの？
- ・[テレビカメラに見せた通帳に記載されていた]自動払込計3,4000円で何？あと保険料を3件、計2,4000円も払ってる。こうやってみんなから集めた税金を月22万円も使っていくんだ。
- ・“保育園はどっこも5時まで”なんて明らかな嘘。
- ・被保護世帯でも学資保険への出費は許容するという最高裁判決が出て以来、学資保険名目で貯金をする手法が被保護世帯に広まった。こんな小さな子どもたちに、教育費が月7万5千円もかかるわけがないから、この家もこの手法で貯金

しているんだと思う。

- ・画面に表示された家計支出内訳を合計してみた。計181,000円。表示されている226,000円にはならない。45,000円はどこに消えた？

[テレビで困窮を訴えた被保護母子世帯Cに対して]

- ・化粧品が「すり減ってます」とか言ってわざわざ見せてるけど、化粧品がすり減っていくのは当たり前。それにあの化粧品は千円くらいするクラス。本当に金がない人は100均で済ますし、アイシャドウとかつけない。
- ・お母さんと幼児の二人暮らしでガス代1万8千円は普通ありえない。
- ・幼い子供との二人暮らしで家賃5万の家を借りる必要があるのか。さっさと安いアパートに引っ越すべきでは。
- ・最後の人、昼間子供を保育園に預けているのに、仕事をしてないのはなぜ？ 昼間何してんの？

b. 制度的問題として捉えるメタ視点からの投稿

- ・[資格も経験も職歴も技術も何もないであろう母親Bが] 派遣でフルで働いても、手取り20万は貰えない。だからこの人が就活面接でも働く気を示さないのは当然。楽な暮らし捨てて自分から苦勞を背負うわけがない。
- ・この人別に悪くない。働かないでこんなにお金もらえるんなら、誰だって働かない。
- ・[日本が遥かに貧しかった時代に、母子家庭でも子供の養育費を確保できるようにと創設された] 母子加算がこんな贅沢のために使われるようになった。だから存在意義を失って廃止。いいかげん気づけよ。

c. マスコミや政党批判に向かうメタ視線からの投稿

- ・マスコミはどこも母子加算の反対意見を報じない。
- ・なんでマスコミはこんな人の味方するの？ おかしいよ。
- ・マスコミはこうした洗脳番組組んで、世論を誘導しようとしているのがミエミエ。民主党支持のマスコミによる謀略報道。ただ馬鹿なのは、サンプルにした家庭が困窮してないのがバレバレだったこと。

- ・鳩山さん、もう勘弁して。納税者も大切にしてください。
- ・毎日新聞記者も一般常識欠けてるからこんな記事書いたんだろう。
- ・平均年収1千万超の新聞屋から見たら、これで十分かわいそうなんだろう。
- ・これで読者の同情をかえると思っている毎日新聞の脳内を見てみたい。
- ・これってマスコミによる「母子家庭甘ったれるなキャンペーン」なのか？ [そうとしか思えないほど説得力がない記事だが、という皮肉をこめた発言]。

d. 経験から社会的公正感に訴える投稿

- ・介護職だけど、4-5万の年金で暮らしてるバアちゃんたちがいっぱいいる。生活保護は最後の手段と、冬もストーブつけずに布団にくるまって、頑張ってる。その人達のことを思うと、いったいこの人達って何なの？と思わずにいられない。
- ・四大出の介護職だけど、月収20万を超えたことない。それに介護の世界にはシングルマザーなんてザラに居る。甘ったれるな。

IV-2. ネット言論の特性からもたらされる変化

IV-2-1. 各個撃破への固執

このように実験資料②をかいつまんで振り返って見ただけでも、前章で説明したネット言論の諸特徴を実例に添って確認できると同時に、その影響力がエリート言論のそれとはかなり異質な仕方でも浸透し作用することも、見えてくるように思われる。

投稿数で見ると、私が引用元にした掲示板やコメント欄で最大多数を占めたのは圧倒的に「即事的・即物的な生活者視点からの投稿」であった。一口に「生活者視点」と言っても内実は多様だが、節約に努め家計をやりくりしている人間の一人として、被保護世帯に垣間見られる「甘さ（節約努力の不足）」や「甘え」を指摘するような投稿が非常に多い。数の上で次いで多いのは、「納税者視点」であろう。“自分たちが必死に働いて収めた税金が、外食などの贅沢のために分配される”ということに対する不満を基本的動機とするようなタイプの投稿である。ネット上では、窮乏した老人や母子の、餓死や自死のようなショッキングな事件が過去にも大きな話題となってきた。そのために、そうした凄惨な事件を

防ぐために確保されるべき「命綱」のようなものとして生活保護を捉え、その限りで支給に納得する傾向が強い。故に不正受給や贅沢な要求などには、感情的な反発が根強いのである。

他方、「外食に拘らず、自宅で手巻き寿司にすれば？」といった、素朴な提案なども中にはあるのだから、私が「生活者視点」と捉えた投稿だけを見ても多様性が非常に大きいことが判るだろう。これに加えて、制度的問題を見るメタ視点、マスコミ批判を主眼とするメタ視線、自活しながらより切実な貧困に直面している老人や母子家庭に目を向け、違和感を吐露する視点などが、積み重なっているのが、「ネット言論」なのである。

母子加算の段階的廃止が始まってから、2009年の総選挙が迫ってきた時期にかけては、母子加算復活を訴えるような報道が数多くなされ、マスコミによる「母子加算復活キャンペーン」が行われているかのような様相を呈した。取り上げる事例はメディア毎に異なった。「回転寿司に行けなくなった」という訴え以外にも、「娘と沖縄旅行を計画していたのに、行けなくなった」「息子に新型ゲーム機を買ってやれなくなった」「スーパーの特売品ばかり買わざるをえなくなった」等の訴えが取り上げられ、報じられた（こうしたキャンペーン報道に続けて接する中で蓄積された反発・怒りが、資料②のネット言論の表現にも影響を与えているだろう）。このように取り上げる訴えは多様だったが、報道の論旨はどれも同じだった。「母子加算が廃止されて、被保護母子世帯は困窮の度を増し、ささやかな希望すら失っている。母子加算復活を支持して、彼らの希望を取り戻してあげよう」というストーリーである。

ネット言論における多様性と斉一性の組み合わせは、こうしたマスメディアによるキャンペーンの「ディティールに違い/論旨は同じ」という当時の傾向とは大きく異なる。ネット言論投稿者の多くは、報道の細部にこだわって投稿し、「これっておかしいだろ」と指摘して終わる。マスメディアの報道が、「母子加算復活を」というメッセージを繰り返すのとは違い、ネット言論には母子加算復活の是非について結論を誘導するような、「大きな論旨」「大きなストーリー」が存在しないのである。「母子加算がこんな贅沢のために使われるようになった。だから存在意義を失って廃止。いいかげん気づけよ」という投稿のように、母子加算廃止の経緯を振り返り、その正当性を追認するような書き込みも確認できるわけだが、

多数のディテール専念投稿と同じ資格で、それに紛れて存在しているだけである。したがってネット言論に対して、全体的な反論を加えることは難しい。全体的な論旨など、そもそも成立していないからである。

しかし例えば新聞記事で取り上げられた母子が、仮にネット言論にあった推測の通り、普段から大量摂食に慣れている人々だったとしても、そんなディテールと母子加算復活の是非とは関係がない。①-1の毎日新聞記事で取り上げられた長男が既に18歳で、いずれにしても母子加算復活の恩恵は後一年も得られないとしても、そんな事例を取り上げて母子加算復活の必要性を訴えた毎日新聞の問題であって、やはり母子加算復活の是非とは別問題である。しかし投稿者は、こうした問題点の指摘をするだけで役目を終え、話を広げて、「大きな問題」を語りたいという意向をまったく示さない。こうした、ネット言論においてしばしば見られる近視眼的な姿勢は、エリート言論で普通に見られる俯瞰志向とは対照的である。エリート達はしばしば、「大きな問題」（この場合では母子加算復活の是非）を自分の問題として引き受け、それに対する自分の態度を自覚してから、詳細を論じる。だから詳細は「大きな意向」の都合に合わせて論じられたり、無視・軽視されたりもするのだ。一人一人が大きな問題に取り組み、正しい解決を目指そうというこうした像は、エリートの名にふさわしい、自尊心・自律心溢れる姿だと言えよう。

しかしネット言論では、投稿者は各自の視点に従って、その範囲でできる一点集中的な仕事をやり、仕事を終われば退散する。近距離から歩兵は銃撃し、中距離から砲兵は砲撃し、空軍は空から近接支援攻撃を行い、工兵は橋を造る…軍組織に見られるそうした高度な分業体制を彷彿とさせる姿である。しかしもちろんネット投稿者達も、高度な役割分担を決めた上で投稿しているわけではない。彼らの多くは、“母子加算復活の是非なんて大きな問題を論じるのは荷が重いし面倒臭い。でも、これだけは自信を持って言えるし、言わせてもらう。「上履きは2千円もしない！」”…といったところなのだろう。「母子加算復活の是非」という大問題にコミットすることに義務や責任のようなものさえ感じがちな自負心溢れるエリート言論人とは違い、ネット投稿者は遥かに自由に関心を選択する。「母子加算復活の是非なんて大きな問題は私の知ったことではないが」という前置きをして、言いたいことだけを語る自由があるのだ。

ネット投稿者が思いのままに行使しているこうした自由、すなわち、背伸びせずに、知らないこと・判らないことは知らない・判らないと放置し、自分に言うことだけを言う自由が、私が行った実験でも被験者に影響を与えたのではないだろうか。資料①を読んだ被験者たちは、多かれ少なかれエリート言論人に同一化し、社会正義の高みから母子加算復活の是非という「大きな問題」に「正解」を与えて見せた。しかし資料②を読むことで、数多くの発見に接し、自分には知らないこと、判っていないことが大量にあることを改めて思い知る。主婦の違和感も、納税者の怒りも、おそらく彼らの多くは想像さえできていなかったのだ。こうして「エリート言論のコスモスからネット言論のカオスへ」放り出されると、エリート言論人への同一化も、いかにも不自然な背伸びに思えてくるだろう。そうして被験者たちも、新聞記者の真似は止めて、背伸びせず、知らないこと・判らないことは知らない・判らないと放置して良いのだ、自分には社会問題に対する「正解」を示す義務も責任もない、自分はエリート言論人ではなく、一般大衆の一人なのだと思います。同一化の対象が、新聞記者から、ネットへの投稿者へと部分的に切り替わるのだ。

では各人が好き勝手に語るネット言論が、いかにして実験結果に現れたような顕著な方向性影響力を行使できるのか。その疑問に対する回答の一つは、既に見えているだろう。多くの被験者が実験の回答で記述したように、ネット言論の個々の指摘には、被験者も同意・納得せざるをえない主張がしばしば含まれている。説得力を感じさせる指摘を含む投稿が仮に20%しかないとしても、投稿が千件あれば、鋭い指摘も200件。個々の指摘はディテールにこだわっているから、致命傷を生みはしない。また80%の投稿は説得力がない、ピンとこない、信頼できない、と切り捨てられるであろうから、「ネット言論など信頼できない」という評価にも大きな変化は起きないだろう。しかしそれでも、鋭い指摘は夥しい数に上り、マスメディアの言説に群がり、そこから被験者たちの信頼を徐々に侵し、削ぎ取っていくのである。この効果においては、ネット言論の斉一性が機能しているのだ。

しかもマスメディアの影響力にダメージを与えるためには、それほど「鋭い」指摘は要らないのかもしれない。マスメディアが纏う“権威”は、情緒的基盤に支えられた、もっとデリケートで不確かなものだと思うからだ。例えば、「40

皿は食いすぎだろう」という素朴で単純な指摘を考えてみよう。こう指摘されれば、「なるほど、二人で40皿・寿司80個も食うのは凄いな」と同意する者も出てくる。その一部は「でもそんなことはどうでもいいことだ」と考え、その指摘の影響を閉ざそうとするだろうが、そこまで第一局面での判断に忠誠心を示さない者も多いだろう。ではこのちっぽけな「40皿問題」に限って見るとして、影響を受け入れる者は、どう影響されるのだろうか。「40皿は食いすぎだろう」と指摘され、納得したら、若者の認識にどういった変化が生じるのか。

この指摘を受け入れたとしても、大きな問題への影響が殆どないことは、既述の18歳問題等の他の例と同様だろう。40皿以上という具体的な量を記事に明記する必要などそもそもなかったはずだから、このような注目を集めざるをえない記述を盛り込んだことは、無神経な新聞記者の落ち度と考えることさえできるかもしれない。しかしそれでも、こうした指摘は何も変化をもたらさないわけではない。一言で言うなら、そこで生じるのは、マスコミによる「束縛」が緩む、という現象ではないだろうか。マスコミ報道を読んだ実験の「第一局面」においては、被験者たちにとって毎日新聞記事は「識者でもある大手新聞の記者による、弱者（生活保護受給者にして母子家庭）の困窮ぶりを明らかにする報道」として捉えられ、受け入れられた^{【※注15】}。そこには笑いを誘う滑稽味など微塵もないし、あってはならない。同情し、助けてあげるべき弱者の話がなされているのだから、集中し、緊張して、識者の話を拝聴するべきなのだ。

しかし実験の第二局面に入ると、ネット言論が突然解き放たれる。そのしばしば滑稽味を帯びる簡潔で率直すぎるほど率直な言葉は、「母子加算が廃止されて、被保護母子世帯は困窮の度を増し、ささやかな希望すら失っている。母子加算復活を支持して、彼らの希望を取り戻してあげよう」という、マスコミが作り上げた、悲愴で厳粛なストーリーに向かって投げかけられるのだ。「40皿は食い過ぎだろ」、この簡潔で遠慮ない投稿に感化された者は、悲愴で厳粛な物語空間に留まることが難しくなる。そして同時に、この変化を経験した被験者は、マスコミの作ったストーリーにも、そしてそれにハマっていた自分自身にも、冷めた目を向け始めるだろう。“月に一度、回転寿司店に出向いて寿司40皿以上を食してきたという健啖家の親子が、母子加算廃止でそれができなくなったという。だから母子加算を復活させて、また月一で寿司40皿を食べるようにしてあげよう」と毎日新

聞は訴えている。まあ、長男の年齢があるから、母子加算が復活されたところで、何回か寿司を食ったら、再度加算打ち切りになる運命なのだが、毎日新聞はそのことは気にしていないようだ。…さて、この話は本当に悲愴で厳粛なのか。この話も、それにノセられて母子加算復活に賛同した自分も、むしろ滑稽なのではないか？”…こんな、マスコミの物語空間を外れた、冷めた視点が、ネット言論との接触によって開かれるのである。

ネット言論は、母子加算復活に反対しているわけではない。賛成するように大衆を誘導しているマスコミに反発し、その影響を削ぎようとしている。そしてエリート言論の武器である信用・権威を各個撃破していくことで、それに一定の成功を収めているだけだ。

IV-2-2. 滑稽化戦術

マスメディアは信用や権威というアドバンテージを有し、当然ながらそれを活用している。厳粛な雰囲気纏って、母子の苦難を告発し、「多くの母の願い」を自称して、来る総選挙で母子加算復活という社会正義を実現するよう、民に指示している。都合の悪い情報を無視ないし軽視し、母子の苦難を幾つか羅列するという簡便な手順を踏むだけで、これだけのストーリーを読者に投与できるのだから、彼らが有しているアドバンテージの大きさには驚くべきものがある。しかしこのアドバンテージは、場合によってはディスアドバンテージに急転直下しうる。欧米で行われた昔の裁判などを描いた映画やドラマで、裁判官が「バッハ風」のカツラを被っている姿を目にすることがある。ああした慣習は裁判官の権威を演出する方法のひとつだったのだろうが、その装いが権威の厳粛さと結びついていない我々から見ると、滑稽味と紙一重の危うさを感じられる。実際コメディドラマならば、そうした装いはしばしば笑いのネタに利用されるのである。「厳粛な雰囲気」など、所詮「雰囲気」にすぎないのだ。

ネット言論の「効き方」を顧みると、ネット言論にしばしば見られる、不必要なまでのユーモア偏重も、実はネット言論の重要な武器なのだと一層明確に理解できるだろう。敵のアドバンテージを逆用して、ディスアドバンテージに変える、魔術的な武器である。厳粛な面持ちで、悲愴な現実を告発し、大衆の同情を喚起し誘導するマスメディアが多用する語り口に対して、ネット言論が用いる対抗戦

術の一つが、「滑稽化」なのだ。

2014-5年にかけて、シリアで「ISIS (イスラム国)」系の武装組織に、日本の民間人二人が拘束されるという事件が起こった。イラク戦争以降不安定化し、渡航自粛勧告が出ている地域に、外務省の制止を振り切ってジャーナリストやボランティア活動家が自ら出向き、案の定人質にされるといった事態が、当時は繰り返されていた。そうした場合、ネット言論では冷ややかな目が向けられ、「自己責任」と切り捨てられることが多かったのだが、しかし上記のケースで人質にされた人物の一人は、左派のジャーナリストやボランティアといった典型的な人物像にはそぐわない、かなり奇矯なキャラクターだと認識され、「2ちゃんねる」などでも不器用なその来歴に関心やちょっとした同情が集まることになった。そしてそれとともに、他の人質事件とは異なり、犯人に対する、やり場のない怒りや不快感が、ネット言論でも広く生じたのである。そこでSNSや匿名掲示板、画像投稿サイトなどをまたいで唐突に広まったのが、「ISISクソコラグランプリ」であった。これはISISが公表したプロパガンダビデオや画像の一部を流用して、あえて拙く質の低いコラージュ(クソコラ)を作り、発表し合うという、人質の深刻な状況にはまったくそぐわない、奇妙で不真面目なお祭り騒ぎであった。当然、我が国のマスメディアでは識者達が、ネットで湧き上がったこの不謹慎な企画に対して非難や懸念を表明した。しかし意外にも海外のメディアの一部からは、この企画をISISのプロパガンダ戦略に対抗する、カウンター・プロパガンダとして理解を示し、有効性を認める論説が幾つか公表されもした。“ISISはプロパガンダ動画の作成・配信に力を入れ、「強く、クールで容赦のないダーク・ヒーロー」のような存在として自己を誇示するイメージ戦略を使い、欧米の非イスラム教徒の若者からも多くの志願兵を得てきた。CIAなどもこの事態を懸念し、カウンター・プロパガンダを模索したが、うまくいかなかった。ところが日本のSNS上では、ISISの画像でチープで滑稽なコラージュを作り、発表し合うという運動が突如盛り上がって、有効なカウンター・プロパガンダの具体的な手法が示されたのである。こうしたチープで滑稽なコラージュを目にした者は、ISISの姿を再び見るようになって、もはや「強く、クールで容赦のないダーク・ヒーロー」というイメージを喚起することはできなくなる。滑稽なコラージュのイメージが蘇り、畏敬ではなく笑いがまず誘い出されてしまうからだ” …例えばこういった主

旨の論説があった^{〔※注16〕}。…この種の評価や理解が適切なものか否か、私は判断できない。しかし「ISISに対する、やり場のない怒りや不快感が、ネット言論でも渦巻いた」時期に、突然「ISISクソコラグランプリ」が盛り上がった背景には、ネットユーザー達の怒りと、「クソコラでISISの連中を笑い者にしてやろうぜ」という戦術的な意志があったであろうことには、容易に推測できる。本稿が見てきたように、「滑稽化」はネット言論の典型的な対抗戦術だからである。

しかし左派はしばしば、保守派や右派は感情的だが、自分達の基盤は理性的だ、と考える。したがって情緒を変える滑稽化のような戦術が、左派にも効くという現実を受け入れにくいし、理解することも難しいのである。しかし道徳心理学者ジョナサン・ハイトなども示唆してきたように、このような左派の自己認識は、まったく現実的ではない。彼らの主張も、保守派や右派と同様に、感情的な基盤に依存しているのである。そしてこれもジョナサン・ハイトが多大な努力の末に示したことだが、左派はそうした感情的基盤に訴えかけるチャンネル（水路）を、保守派や右派に比べ、少数しか持っていない。そして左派が、レポートリーが少ない分、多用せざるを得なくなっているチャンネルのひとつが、“弱者に同情し、それを守るべし”という道徳感情なのである^{〔※注17〕}。したがって、弱者への同情心に訴えかけるこうしたチャンネルが巧みに滑稽化された場合、左派の言説は人々を動かす力を大きく失うことになる。

こうした理解を持った上で、私の実験の第二局面を見直してみよう。毎日新聞は母子家庭の窮状を強調し、“弱者に同情し、それを守るべし”という読者の道義心に訴えかけるという戦術をとっており、ほぼそれ一辺倒である。その点で毎日新聞の誘導戦術は左派の典型に見える。そしてネット言論は、左派のこの戦術を見透かし、すかさず左派の情緒的アピールを滑稽化で破壊し、左派の足元を掬うのだが、左派言論人は先ほどまで自分達の誘導に従っていた若者達が、なぜクスクス笑い出したのかさえ、おそらく理解できない。自分の足元を見ないで、普遍の高みに立って社会を見下ろしている気であるので、自分が足元を掬われたことにさえ、気づけないのであろう。

IV-2-3. 影響力と評価の乖離

ネット言論によって、マスメディアによる報道の「おかしい」点を多数指摘され、多くの被験者は、マスコミへの理性的かつ情緒的な同調から身を引いた。しかしそれをネット言論や新聞に対する全体的評価の変更に結び付ける必然性はない。第二章で見たように、第二局面でネット言論の具体例に接し、それに対する評価を若干上げた被験者が比較的多かったが、母子加算復活への賛同を減らしながら、逆にネット言論に対する評価を下げ、新聞に対する評価を上げた被験者もいた。いずれにせよ、ネット言論との接触は、第一局面における母子加算復活への賛同を取り下げよう働きかける圧力として被験者に作用したが、「ではどうすべきなのか」を決める圧力も、「新聞/ネット言論へ全体的評価をどう下すべきか」という評価問題を左右する圧力も、大して示さなかったと言える。したがってネット言論のインパクトは、被験者達の賛否を「どちらとも言えない」ラインを中心に密集させ、その一方で評価に関しては不合理と思えるほどの分散をもたらしたのである。被験者達はネット言論との接触によって、新聞の言説に支配された状態から脱し、自由を得たと言えるかもしれない。新聞に替わって、ネット言論が大きな問題に関する支配を始めた、というわけではないからだ。おそらく若者がネット言論の思考や認識や倫理を広範に受容し、能動的自律的に活動できるようになるには、長期に亙る接触を通じて「サイバークスケイド」に浸り、「もっともらしさを支える構造」を通じて多くを習得しなければならないだろう。こうした長期修練過程を修了できるほどタフで知的好奇心に富んだ若者は、極く一部にすぎない。多くの若者はそこまでネット言論に入れ込まないのである。したがって「ネット言論」を構成する投稿の多くは、それほどコアでない閲覧者による、即事的・即物的投稿で占められるという事態も存続することになる（特に出現頻度が高い「時事ネタ」の言論ではそうなるだろう）。そして、他の選択肢を知らず、否応なくマスメディアに誘導・支配された状態にあった若者にとっては、少なくともファーストコンタクトにおけるネット言論は、解放者として姿を現すと考えられる。「ググレ、カス」（少しは自分で調べ、考えろ）以上の教えは残さずに去っていくという点で、無責任にも思える「解放者」であるが、支配ならぬ「解放」とは、本来そうしたもののだろう。

V. 状況論的観点との接合 —ムードの転換・状況の転換・判断の転換

V-1. 「状況論的観点」の骨子

この実験報告と考察の最後に、私がかねてよりこだわっている、状況論的な観点との接合可能性に目を向け、研究の展望に代えておきたい。私が「状況論的観点」と呼ぶのは、認知や行動選択の状況依存性を重視する考え方のことである。例えば前衛芸術家が既製品を美術展に出品した場合、その行動は、“芸術とは、芸術展示の場で展示された物のことにすぎない”という味気なく破壊的な認識を世界に突きつけるだろう。しかし美術史や芸術哲学の関心を離れて見た場合、この前衛芸術家の示唆は、一般性を有する重要な認識を提出しているように思われる。すなわち、実際に人々は、しばしば状況に深く依存した形で、認識や行動を選択しているのだ、という認識である。そう、“芸術とは、芸術展示の場で展示された物のこと”というのは、一面の真理であり、人々は専門家集団が運営している社会制度化された枠組み（美術館やギャラリーや美術誌その他）を利用して、芸術（の外延）を受け入れ、弁別しているのである。認知や行動が状況との関連づけの中で選択されるというこうした観点は、或る要素の認知変更が、他の諸要素の大規模な認知変更を雪崩式にもたらすことがあるという現象を理解する上でも重要であると思われる。

認知や行動選択の状況依存性を重視する、こうした考え方を、実験の第二局面の理解に適用してみようというのが、私のここでの試みである。

V-2. 実験の第二局面におけるムードの変化

まず、実験実施において繰り返し観察された、ある変化について改めて言及したい。それは実験の第一局面から第二局面に移行した途端に発生する、「ムードの変化」である。

大学に入学したばかりの新生が対象なのだから無理もないことだが、実験の第一局面は決まって、緊張感が漲る、静寂の中で進行する。それはまさに、試験中の雰囲気そのものだ。ところが実験が第二局面に移り、資料②が配布されると、その雰囲気に大きな変化が生じるのが常だった。資料を読み始めた被験者から順次クスクス笑いが洩れ始め、しばしば独り言がそれに続く。「あ、これ、俺も思っ

たんだよなー」「そっかー！」といった類の独言である。そうなると先程までの緊張感は溶け去り、教室全体に打ち解けた雰囲気が広がる。年によっては私語（といっても実験に関わる小声の会話だが）が始まったり、私に対して新聞報道に関して質問を向けてくる学生も現れたりして、ちょっとした秩序の弛緩にまで進んだ。ついさっきまで試験中だったのに、今やチャイムが鳴り響き、休み時間が始まった…少々大げさに言えば、それに似たような様相転換である。しかしいつチャイムが鳴ったというのか？ …ネット言論のユーモラスな語り口が、学生達の脳内でチャイムを鳴らしてしまったのである。

V-3. 変化のモデル

ネット言論内のユーモアが、しばしば厳粛なムードを破壊する効果を持つことはこれまでも論じてきたので、この様相転換に新たな謎は含まれていないように思われるかもしれない。しかし私見では、ある種の状況論的観点を加味することで、実験の第二局面で起こる変化について、より詳細な理解が可能になると思われる。そこでこの場を使ってその変化のプロセスを分析的に再構築してみたい。以下は、実際に起ったことの記述ではなく、起こりえたことに基づいたモデル構築である。

- ・実験の第二局面に入ると被験者たちは、ネット言論から生徒を遠ざけようと努めるはずの教師がネット言論を学生に読ませるという、アノマリーな出来事に直面する。“メディア・リテラシーとか言っていたが、「ネットの危険性」とか「賢いネット活用法」とかいった、お馴染みの訓話をするつもりはないようだ”とも気づいて、経験から得ていたデフォルトの教師像がゆらぎ、起こっている事態への好奇心が増す。次いでネット言論のユーモラスな語り口が、被験者に緊張緩和をもたらし、不謹慎な笑いなども漏れるが、教員もその変化を笑みを浮かべながら黙認する態度を示すので、デフォルトの教師像は更に撤回され、第一局面で自らが纏ってきた「厳粛さ」の装いを捨てる被験者が増える。



- ・緊張緩和を表出するクスリ笑い、独語、お喋りなどが教室に現れると、そうした緊張弛緩を示す様々なシグナルの知覚が、被験者達にフィードバックされ、

彼らの状況認識を変えていく（教室の「雰囲気」が、「試験中に似た雰囲気」から「休み時間に似た雰囲気」に変わり、その認識が共有される）。権威による介入・抑制がないため、学生集団内の相互作用が進み、同一空間に居ながら「状況」認識が集団レベルで変えられるのである。



- ・「試験に似た状況」が終わり、「休み時間に似た状況」が現れ、容認されている、という状況の転換が「教員が設定した『正解』を言い当てる、深刻な（試験）ゲーム」が終わり、「自分のホンネを仲間内で気軽に語り合う、（休み時間）ゲーム」が始まる、といった行動規範・行動モデルの変更を（「決定」まではできないまでも）後押しする。試験答案を評価する審判は教師だが、休み時間のお喋りなら審判はいないか、いるとしたら仲間達だろう。つまり想定される評価者も評価基準も、状況に応じて大きく変わりうるのだ。厳粛な審判から無責任な傍観者に格下げになった教員・南への配慮は大幅に減じられ、得られた自由の中で新たな判断が下されるが、その際に“仲間の共感を得られるような回答”を選択する新規準も力を増すだろう。つまり、「母子加算を復活させるべき」という主張に、賛成/反対か」等の、質問票にある問いに対する回答が、「試験答案用回答」（賛成50）から、「休み時間会話用回答」（自分にはどちらとも言えない）のようなものに切り替えられるのである。

要点は以下である。

ネット言論との接触が「キューを出す」形で、状況の変化が起こる。

その中で、私（教員）の認識も、「デフォルト」の教師像が適用された状態から、「寛容・無責任な傍観者」という実像に近いイメージへと変更され、被験者は教師・エリート言論への忖度から大幅に解放される。

それらの変更によって更に、適用される判断基準や、共感を得るべき対象（審判員）の廃棄・新採用も起こり、各種判断に広範なゆらぎが生じることになる。

この状況転換のより詳細なモデルを参考にするなら、実験の第二局面で起こる変化について、以下のような仮説も可能になるだろう。

例えば、

・第一局面の「試験答案用回答」では、「どちらとも言えない」といったニュートラルな回答は、教師に好まれないかもしれないという懸念が被験者達に持たれた。「自分の意見を持つこと」「自分の頭で考えること」は（少なくともタテマエとしては）過去の教師達からも繰り返し要求・奨励されてきたからである。また弱者の困窮を伝える報道に接したのに、どっちつかずの判断を下した場合、弱者に優しくない態度が取られていると見なされ、教師の不興を買うかもしれない。特にリベラル傾向の強い教師の場合、弱者擁護という道徳原則への訴えは既述の通り、数少ない、重要なチャンネルなので、それを無視された場合は大きな反発を起こす恐れは経験的にも高いだろう。したがって「リベラル」な校風で有名な高校で教育を受けてきたような被験者は、そうした危険性には敏感だろうと想定される。したがって「どちらとも言えない」は避けられ、回答が＋方向に一層偏る傾向が生じていた。

したがって状況転換が起こり、「教師の意向」を配慮する必要はなさそうだ、「試験答案用回答」を放棄して良いようだとすると、被験者の回答は遠慮なく「どちらとも言えない」に寄っていく変化を示した。

・全体的に言えば、新聞やネット言論に対する各種評価は、母子加算賛否の判断ほど状況依存的ではないだろう。教師がどういう評価を好むか、推測が立ちにくい部分が多いからである。しかし比較的想像しやすいのは、教師に宛てて書かれる「試験答案用回答」では、経験的に想定された「教師の意向」に迎合するために、ネット言論に対する評価を低めに出す傾向が強まる、という可能性である。故に、第二局面の「休み時間会話用回答」では、そうした付度が解除された分、評価が若干浮上した。

さて、ネット言論のインパクトが実験においてもたらした変化をこのように理解していくことが可能なら、サイバー空間の中でのネット言論のインパクトについても、その観点を援用してより詳細な理解が可能になるかもしれないと期待される。厳粛な雰囲気を纏うマスコミ報道を出発点にして展開されていくネット言論では、「権威者の支配を壊し、“休み時間”を現出させる」プロセス・手法も繰

り返し観察されるだろうと推測されるからである。実験結果に対して、私をもたらしえた理解がせいぜいのところ、部分的な端緒にすぎないことは明らかだ。しかし本稿で報告したネット言論のインパクトに関する実験は、こうしたより詳細なプロセスへの好奇心を、一部の読者の内に喚起する効果をもちうるのではないか。そう期待したい。

まとめ：ネット言論の攻撃はなぜ効いたのか / ネット言論に対する 攻撃はなぜ効かなかったのか

「ネット言論との接触は、若者をどう変えるのか」…この問いに対して私が本論で提起した回答は、以下のように要約できるだろう。ネット言論との接触によって、若者に様々な意見の変更が引き起こされることが確認された。しかし母子加算復活賛否の変化に関して言えば、既述のとおり、ネット言論はマスコミの影響力を取り除いた後、何か別の考えを埋め込むわけではない。ネット言論の影響を受け、母子加算復活に対する賛否意見を変えた被験者の多くも、積極的に「母子加算復活反対」へと立場を変えたわけではない。被験者の多くは、「賛成します」という新聞報道への初期の賛同を捨て、「私にはどちらとも言えない」という立場に撤退しただけなのである。そして、この「私にはどちらとも言えない」という見解すら、ネット言論が被験者に吹き込んだ教えではないかもしれない。そのような教えなど、ネット上の書き込みの「中」には現れていなかったのだから。社会正義を代表するかの如く振る舞う新聞という権威が、露骨に母子加算復活を誘導している場合、それに逆らい、「私にはどちらとも言えない」という主張を貫くには、エネルギーや勇気、自尊心が必要である。逆に言えば、特に反対すべき理由や根拠が見当たらないなら、自信満々に主張している新聞や教師には逆らわないで同調しておいた方が無難なのだ。被験者達は指導的エリートではないから、易々と指導的エリートに順応し同調できる、というわけである。しかしネット言論との接触を経て、指導的エリートを気取ることなく、自分の得意分野からだけ語り、去っていくネットの投稿者達を彼らも目にし、ここで彼らの多くも指導的エリートに従わない自由を得た。「私にはどちらとも言えない」「私には

そんなことわからない」と言って憚らないエネルギーや勇気、自尊心を得たのである。

しかしこのような捉え方は、被験者達の意見を余りにも不確かで不安定で状況依存的に捉えていると考えられるかもしれない。論拠も信念もないまま賛成に流されたかと思えば、今度は論拠も信念もないまま賛成の撤回に動く…被験者達は本当にこれほど頼りない存在なのだろうか？…だが被験者自身が自らの「頼りなさ」を示した以上、それは我々にとっては受け入れざるをえない与件であろう。我々が為すべきことは、彼らの頼りなさ・変わり身を否認することではなく、理解することである（そして彼らの頼りなさを通じて、理性的存在として誇張されてきた我々自身の頼りなさを発見し、理解するべきだろう）。その目標のためには、ネット言論の特性理解と彼らの置かれた状況の認識が有益だというのが私の主張であった。権威に屈せず、それを向こうに回して自らの「未決定」な立場を堂々と掲げる…こうした「フリーハンド」な立場への解放に、ネット言論が含んでいた多数の鋭い指摘や発見、ムードを変える滑稽化戦術などが、寄与したと思われる。そして新聞やネット言論に対する各種評価の混乱に満ちた変化については、権威の喪失・「正解」を指定する新たな権威の不在によって、共感や反発が入り乱れる感情的な諸反応が露呈しているように見える。

では逆方向の問い、「ネット言論に対する攻撃はなぜ効かないのか」という問いには、どのような示唆が私に可能だろうか？

「ネットリテラシー教育」といったものが、学校教育に組み込まれてきたためなのか、「ネット言論など信用してはいけない」「ネット言論はデマばかり」などと強調するネガティブキャンペーンの成果が、若者にも広く浸透しているようである。そのことは、私の実験におけるネット言論に対する相対的な評価が終始低いことから窺われる。しかしそれにもかかわらず、教師やエリート言論人はなぜネット言論の影響を抑止できないのかも、今や部分的には理解可能だろう。端的に言って、虚偽情報が含まれることが往々にしてあるとしても、ネット言論に占めるそうした情報の役割は、意外なほど小さいと考えられるからである。

「IV-1. 資料②の視点別例示」で挙げた、投稿の典型例を確認してもらいたい。「デマである」として全否定できる書き込みが、幾つ見つかるだろうか。私がざっ

と振り返って見て言えるのは、せいぜいのところ下記のような部分的な指摘であった。

- ・「上履きは380円で買える」というのは、過度の一般化かもしれない。その値段で買えるケースがあるとしても、地域によってはその値段で購入できる量販店やディスカウントショップにアクセス不可かもしれないから（アマゾンなどのネット通販では送料が値段に加算されていたり、追加で発生したりするので、この種の廉価商品はディスカウントショップでの店頭価格よりも割高になることが多い）。
- ・[母一人、児童一人、就学前乳幼児二人の4人家族で] 教育費が月75,000円もかかるわけがないから、この家も教育費名目で貯金しているのだろうという推測は、根拠薄弱。この家族構成でも多額の教育費が必要となる、何か特殊な事情が存在しているのかもしれない。但し「どんな特殊事情なのか」もっともらしい例を私は思いつけないし、その事情があれば高額支出を本当に合理化できるのかは、判らないが。

…といったところか。他にも見つけられるだろうが、率直に言って、書いていても虚しさを禁じえないほど、重要性を感じられない指摘しかできなかった。したがって、「ネット言論など信用してはいけない」「ネット言論はデマばかり」といった主張を信じ、受け入れている若者でも、実際に実験資料②を読んではしまえば、そうした主張が、影響を食い止める防波堤として殆ど役立たずであることを知ることになる。デマを警戒していても、大多数の投稿はその警戒をやすやすとかい潜って若者との接触を果たす。…デマなどではないのだから。そして「言われてみれば、なるほどと納得せざるをえない指摘」や「そっかー！」と思う指摘などがもたらす「発見の共有」が、エリート言説では隠されていた多くの面を可視化し、若者の視野を急速に広げることになる。

だが「デマばかり」といった教えは酷い誇張だと退けられるとしても、「ネット言論など信用できない」という教えなどは、必要・有用な訓戒として多くの若者の中で多少なりとも生き続けるだろう。「2ちゃんねらー」たちの間ですら、言わずもがなの常識として、その教えが言及されることも間々あった。こうした警戒

心の必要性を否定する者など、滅多にいないはずだ。ただ実験が示したように、ネット言論との接触で、一部の若者の中では、ネット言論に対する評価よりむしろ、新聞に対する評価に、より大きな変化が生じた。つまり、「確かにネット言論など信用できない。しかしマスメディアだって、たいがいだろ」と考えるようになった若者が多く発生したのだ。これがエリート言論人や教師達の盲点である。

ネット言論が大衆に影響力を持つことを嫌ったエリート言論人や教師が、「ネット言論など信用してはいけない」「ネット言論はデマばかり」といった言説による、効果の薄い防御策に固執し満足したのは、ネット言論の特性に対する無理解から生じた失策なのかもしれない。エリート知識人同士の対立においては、相手の信用を傷つけ、「耳を貸してはいけない」と周囲を説得できれば、相手をやり込めることができる。エリートたちは権威を纏うことでエリートの地位を得ているので、相手の信用を傷つければ権威も傷つき、そうして耳を貸さなくなる人が増えれば、相手の発言権をも毀損できるわけだ。

しかし既述のとおり、ネット言論の場ははじめから権威を纏わず、特別な「発言権」も要しない。だから相手の信用を傷つけようとする攻撃方法は効果が薄いのである。言論の中身で共感を得られるか否かが勝負なのであって、事前の信用など誰も求めていないのだ。

かつてエリート言論人の一人が、ネット言論を「便所の落書き」と蔑んで見せ、テレビで活躍していた別のエリート言論人が報道番組内でもこの侮辱を引用し、世間に広めた。しかしこうしたエリート言論人からの少々下品な攻撃に対するネット言論の反応は、「祭り」などと程遠い、冷笑だった。言論そのものではなく、言論媒体をもっぱら蔑んで見せるといのは、いかにも「エリート言論人」風の攻撃法であって、恐ろしく的外れに思われたからだ。“毎日新聞に書かれているからといって、正しいとは限らない。便所の壁に書かれているからといって、正しくないとは限らない。中身で勝負できないのか？”といったところが、2ちゃんねら一達の「薄い反応」の中身だったのである。

ネット言論に対する総体的なイメージが悪く、それに対する評価が低くても、ネット言論人たちはさほど気にしない。それは個々の投稿の鋭さ、的確さ、ムードの変換力などがあれば、総体的な評判などとは関係なく、人々の共感を得て、人々の何かを変えうることを知っているからであろう。自分自身が、そうやって

変えられてきた人間の一人なのだから、その可変性には自信があるのだ。

ネット言論に関しては、「デマばかり」といった非難以外にも、「偏った考え、右翼思想などが幅をきかす、異常な世界である」といった把握に基づいて、若者に近づかないように（あるいは少なくとも決して深入りはしないように）、警告が発せられることもあるだろう。しかしこうした警告さえ、ネット言論との接触が起これば、その影響力を阻止する効果は、あまり期待できないだろう。上記したようなネット言論の具体例の中に、「偏った、異常な思想」を見つけることは難しい。その大部分は、おかしいと思ったことを「おかしいだろ」と指摘した即事的反応であり、「思想」という名に値する程の抽象性も有していないように思われる。ネット言論に「右翼思想」を見つけることは、よほどトピックに恵まれない限り、「デマ」を見つけることと同様、予想に反して難しいのである。

総じてエリート知識人は、自己投影に基づいてネット言論をイメージし、そのイメージを攻撃しているように思われる。例えば、“「保守・反動権力を倒し、自分たちが主導する社会変革を導く」といった「大きな目標」を抱え、その達成のために言論活動を展開する。それを通じて、この大目標を邪魔しそうなものは攻撃し、この大目標達成に利用できそうなものは擁護し取り込む”…古典的な左派知識人の行動原理は、こんなところだったのかもしれない。そしてこうした自分たちの行動原理を投影するために、ネット言論は「保守・反動権力を守り、社会変革を妨害する」といった「大きな目標」のために動く、自己同一性を有する「敵」と見立ててしまう。だからネット言論から吐かれる言葉は「デマゴギー」だと一括され、その背後には「右翼思想」が共有されていると信じられるわけだ。そしてこの自己投影の結果、本稿が指摘してきたような、的外れなネット言論攻撃の数々も為されてきたわけである。実際には、ネット言論で比較的広く共有されているのは、どういう社会を望むか、人々に尋ねもせず、「目指すべきより良い社会」を指図しようとする、左派エリート達の独善性や思い上がりに対する反感や不快感、自分たちの現状を自分たちの達成と捉えて、その中の良きものを守ろうとする志向…といった、反応傾向のようなものにすぎない。エリート知識人の想定とは違って、ネット言論は“我々に似た何か”とはかなり違うのである。

かつて、匿名掲示板などの有害性を排除するために、法的対処が必要だと示唆する論説をマスメディアが繰り返し掲げた時期があった（そうした運動の一部が、

いわゆる「ヘイトスピーチ解消法」とも結びついたら記憶している)。そうしたマスコミの動きに呼応して、「匿名掲示板の是非」が匿名掲示板上で論じられるという皮肉な事態も繰り返したが生じたが、そうした折のひとつで、私は或る投稿を目にした。

“2ちゃんねるなんて、「王様の耳はロバの耳」と叫ぶための穴に過ぎない。王様が怒って埋めさせても、誰かが、どこかに穴を掘って、また呼び始める”

…こういう主旨の簡潔な書き込みだった。「王様の耳はロバの耳」は、イソップ童話のひとつとしてよく知られた物語である。ロバの耳を持った王様が、それを隠して暮らしていたが、王様の散髪を担当していた床屋だけはその秘密を独りで抱え、苦しんでいた。或る日耐えきれなくなった床屋は、森の奥へ走り込み、穴を掘って叫ぶ。「王様の耳はロバの耳!」。気が済むまで繰り返し叫んで、床屋は街に戻ったが、後にその森で採れた葦で葦笛を作ると、不思議な音色がすると評判になる。「王様の耳はロバの耳」と笛が鳴り響くというのである…。

さて、匿名掲示板を「王様の耳はロバの耳、と叫ぶための穴でしかない」と言い切ったこの投稿を読んだ当時の私は、この見知らぬ投稿者に対して感嘆を覚えずにいらなかった。もちろん「王様の耳はロバの耳、と叫ぶための穴」という表現で匿名掲示板群である「2ちゃんねる」の全てを捉えられるとは考えられないし、それはフラストレーションを捨てるための行き場のない「穴」以上のものであることも明らかだ。しかしこの童話は「床屋が掘った穴が、何故か葦笛という管と共鳴していた」というオチを有していたのだから、その点まで含めて考えれば、この「穴」の比喻の含意は元より広いとも考えることもできるだろう。「王様の耳はロバの耳、と叫ぶための穴」は閉ざされた穴ではなく、はじめから世界に開かれた共鳴管だったのである。したがって私としては、この投稿に関して、権威や権力との関係において匿名掲示板の意義を捉える洞察力、そして何より表現の簡潔さ、巧みさに対して、或る種の敬意を抱かざるをえなかったのだ。

マスコミの影響に関する諸研究が示してきたように、マスコミは孤立した無垢な諸個人に影響を与え、支配するわけではない。しばしば人々は情報の受容に際して、例えば「食卓での会話」や「井戸端会議」のような、対人ネットワーク

を介在させ、情報の再評価や再解釈を施して、マスコミの支配力を多少なりとも緩和しようと考えられたのである。それはインターネットなどという物が現れる以前から、ずっと繰り返されてきた営みだったのだろう。だがインターネットは、こうした「井戸端会議」をワールドワイド・ウェブに接続し、参加者を途方もなく拡大するとともに、世界に向けて可視化した。それまでマスコミは、自分たちの影響力を削いでいる、受容者側のコミュニケーションの全貌を直接目にはすることはなかったが、今やその「不遜な」存在が誰の目にも明らかになったのである。

もちろんここで「不遜」と言うのは、権威を背負ったエリート言論の立場から見れば、その権威に逆らう言説はそう見える、というだけの話である。無知蒙昧で判断力を欠いた人々を「正しい」方向へ導くことを自らの使命だと考えているかのような、一部エリート言論人の傲慢さに対する嫌悪感が、ネット言論では共有されてきた。したがってその内部では、「指導者」風の態度はたちまち揶揄の標的にされるだろう。ネット言論で求められるのは、卓越した指導者でも、従順な奴隷でもない。発見をもたらしてくれる投稿ができるだけの選択的な探求心や注意深さ、笑いをもたらしたり、共有したりできるだけのユーモア感覚、マスコミなどの欺瞞に対して怒りを感じることができるだけ自尊心…。ネット言論が参加者に求めるのは、そうした「普通の」共有材である。それさえあれば、共に笑ったり、怒ったり、盛り上がったたり、落ち込んだりできる…つまり何やかやと共に楽しめる。そしてこうして不服従のネットワークが活着している限り、大衆を「より良い社会」へと導くという、一部エリートの独り善がりな野望に対しても愉快な抵抗が続けられるだろう。

さて、「王様の耳はロバの耳、と叫ぶための穴」を欲する、エリートならざる人々からすれば、目立ちすぎた「2ちゃんねる」の消滅は当然の成り行きだったのかもしれない。本音を叫びつつ、不要なトラブルは避けたいという人々にとって、SNSなどに「穴」を分散させるというのは、自然で賢い戦術である。2ちゃんねるという、当時「世界最大」と評された掲示板群は、外見上、確かに「巨人」じみたところがあったし、それ故に周囲の警戒心を煽ることが多かった。しかし今日ネット言論は外見上も、巨人ではない。気になったニュース記事の最後に、読者によるコメント欄が追加されており、それが大量に埋蔵されたネット言論への入り口になっていたりする。あるいは、マスコミの報道に対して微かに覚えて

ネット言論のインパクト

いた違和感が、適確に表現されたタイトルを持つ動画を投稿サイトで見つけ、開いて見た…そんなことがネット言論を現出させるかもしれない。メディアとしてはあちこちに掘られた無数の穴にすぎず、そこで発せられるメッセージはバラバラで、特筆すべき「思想」が見えない。そして日常の中、予期せぬ近場で、足元に空いた小さな穴から声が洩れて、カジュアルで無遠慮な対話がそこで行われていることを人々に気づかせる。「王様の耳はロバの耳」、「王様は裸だ」…その種の滑稽味を帯びたフレーズを執拗低音とする、アンサンブルに参加し、共に楽しもうという誘いである。…これがマスコミという「第四の権力」による支配を阻んでいる、現代の井戸端会議の新たな姿なのである。いささか魔術的なイメージだが、我々の今日の生活が、いささか魔術的な外観を呈するのは避け難いのだろう。

ネット言論のインパクト

注解

注1：本稿では、インターネット上で公開される、氏名・所属などの具体的な属性が特定されない諸個人による投稿を、「ネット言論」と呼ぶことにする。ネット上への投稿であっても、氏名・所属などが明らかに推定される場合は、ネット言論とは見なさない。例えばweb版新聞の記事は、web版にしか掲載されないオリジナル投稿であっても、「ネット言論」からは除外される。その新聞の記者が書いたと推定されるからである。著作物などがまったく知られていない、いわゆる「無名な」人物が氏名を呈示した個人ブログやSNSに書き込んだ内容はネット言論か否か、その投稿に対するレスポンス投稿はどうか…など、「グレーゾーン」の存在もあれこれ指摘可能だろ

うが、我々が不都合なく使用している多くの概念にも同様の指摘は可能なので、そうした境界の曖昧さを実用上の致命傷と見なす必要はないと思う。

注2：母子加算やその変遷に関しては、厚生労働省社会・援護局保護課『有子世帯の扶助・加算について』、平成26年10月21日 第19回社会保障審議会生活保護基準部会資料3、『母子加算の見直しについて』、厚生労働省報道資料、<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000033hz>、その他を参照にして、順次整えていった。

注3：毎日新聞、2009年8月21日東京朝刊 <http://mainichi.jp/select/seiji/09shuinsen/negai/news/20090821ddm041010083000c.html>

注4：asahi.com、2009/10/22、18：52記事 <http://www.asahi.com/politics/update/1022/TKY200910210554.html>

注5：毎日新聞、2009/12/15、地方版 <http://mainichi.jp/area/kyoto/news/20091215ddlk26040689000c.html>

注6：「心むしばむ生活切り詰め」の新聞記事の引用をトップとしてスレッドが立てられ、その記事に対するネットユーザーからの自由な意見投稿が続いた、「2ちゃんねる」内の掲示板が引用の大元だが、実験資料②は、2ちゃんねるから「痛いニュース」を選んで再掲するサイト（『痛いニュース』）を直接の参照元としている。
<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1294821.html>

注7：YouTube投稿動画『生活保護費月額22万円』
<http://www.youtube.com/watch?v=4Qv6rXznxwY>

注8：資料②に引用したコメントの対象は、注7の動画。南は被験者に対し、そのコメントの理解に不可欠な部分に限って、以下のような主旨の口頭での

背景説明を行った。

“母子加算が削減されていった状況で制作・放映された、母子家庭の困窮を使える報道特集が動画投稿サイトに引用され、コメント欄に投稿が殺到した。報道特集前半では“「働きたいけど仕事無い!!! 3児の母が必死の職探し”などとテロップを打たれ、テレビクルーを連れて、母親が求人企業との面接会場に向く場面もあった。しかし実際には、登場した母親は「時給が安い」と面接前から不満をもらし、面接でも自分が出した就業条件を求人企業が受け入れたにもかかわらず、「帰って検討してみます」と笑顔で面接会場から退去し、最後まで就業意欲を示さずに「必死の職探し」を終える。後半では「DV夫と離婚…“自己破産” 30歳シングルマザーの苦悩 “母子加算”全廃へ」というテロップの下、母と2歳児の被保護母子家庭が取材され、「[母子加算が全廃されていない]今でも生活はギリギリ。母子加算がなくなったらやっていけないという不安がある」などの訴えが報じられる。またこの報道特集内で、前半登場の母親が預金通帳をカメラに見せたり、各家計の収支内訳表が画面上に表示されたりしたために、その詳細に関するコメントも多く投稿される結果になった”。

注9：本稿では詳細の提示を省略してしまったが、実験の結果、責任感評価の平均値は以下のように得られた。

〈新聞責任感評価Ⅰ〉 60.5

〈新聞責任感評価Ⅱ〉 35.3

〈ネット言論責任感評価Ⅰ〉 -63.7 〈ネット言論責任感評価Ⅱ〉 -58.1

注10：戦争放棄を謳った日本国憲法第九条を神聖視したり、更には「九条が日本の平和を守っている」「最強の安全保障は憲法9条である」と捉えたりする考え方が、ネット言論ではしばしばこう呼ばれた。もちろん不合理と思える条文「崇拜」に対する揶揄を含んだ呼び名である。

注11：あるトピックに関して、短期間に数千以上のレスポンスが投稿されるほどの注目が寄せられ、議論が熱狂的に盛り上がった状態を指すネットスラングである。朝日新聞社内から業務時間中に、差別用語などを含む荒らし投

稿が2ちゃんねるに対して行われていたことが発覚した事件（「朝日新聞
 アク禁事件」等と呼ばれる）が、2ちゃんねるにおける歴代トップクラス
 の規模の「祭り」としてよく知られている。

注12：ネット言論に関しては、「サイバースケード」のようなモデルが適用さ
 れ、「極端に走る」「先鋭化する」「過激化する」といった変化が想定され
 ることが多い。しかしこのような理論的な想定からみると、ネット言論に
 おける伝統重視や保守主義の主流化は、不可解にも思われる。多くのネッ
 ト言論人が敵視する「サヨク」の方が、「極端に走る」「先鋭化する」「過
 激化する」といった変化を歴史で体現し、100名を超えるとされる死者さ
 え生んできたのと比べると、ネットの保守主義は拍子抜けするほど平凡で、
 新味に欠けるように思われる。しかし先鋭化を生むのは、同種の考え方を
 身に着けた人々が、閉鎖的なコミュニケーションを継続的に行うからで、
 この原理自体は、適用対象がサイバー空間に限定されるわけではない。エ
 リート知識人が例えば「革命的〇〇主義同盟」とか、「反×思想研究会」
 といった団体を形成し、秘義的な議論を重ねて先鋭化したことも、基本的
 には同種の現象だったのである。ウェブはこうしたサークル活動に、画期
 的な利便性と成長可能性を提供しただけだ。こう考えると、エリート主義
 的な新左翼が大挙して先鋭化したのに対して、ネット言論の保守主義には
 そのような大きな動きが見つけにくいのも、それほど不思議な事態ではな
 いかもしい。むしろネットの保守的な志向自体が、変革の最先端（前
 衛）であるとの自負に基づいて先鋭化した左派に反発し、共有済の価値に
 立脚することで先鋭化を抑制しようとしたネット言論人達の選択だったの
 かもしれない。

注13：霊長類の「道徳的」行動を研究した、フランス・ドゥ・ヴァールは、道
 徳の原初的形態として互酬性原則を見出した。cf. Frans B. M. de Waal,
 Good Natured : The Origins of Right and Wrong in Humans and Other
 Animals, Harvard University Press, 1997, フランス・ドゥ・ヴァール
 著、西田利貞・藤井留美訳『利己的なサル、他人を思いやるサル—モラル

はなぜ生まれたのか』、草思社、1998。私が互酬性原則を「原始的」と捉えた背景には、こうした認識がある。

注14：“plausibility structure”は、本来ピーター・L.バーガーの用語である。Peter L. Berger, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Anchor, 1990., ピーター・L.バーガー 著、藺田稔訳『聖なる天蓋—神聖世界の社会学』、新曜社、1979参照。但し本稿では、「或る共有された信念の真正性（本当で正しいこと）を繰り返し確認し、その信念を再強化・維持するために、集団文化内で特化して発達する情報収拾・伝達の構造」といった、基本的で平明な意味で専ら用い、バーガーの議論が含まれていた多義性の一部（システム論的含意など）は無視する。

注15：実験の記述式回答には賛否の判断理由として、“自分はよく知らないが、新聞記者は専門家。新聞の判断が正しいと思った”といったように、“新聞記者は有識者。有識者は正しい”という極めて素朴で権威依存的な判断法を示す物が複数あった。

注16：cf. E.A.Weiss, *What the U.S. can learn from Japan’s Photoshopping of ISIS propaganda*, <https://www.dailydot.com/debug/japan-isis-photo-shop-counterpropaganda-terrorism/>

注17：ハイトの主張に関しては、cf. Jonathan Haidt, *The Righteous Mind: Why Good People are Divided by Politics and Religion*, Penguin, 2013. ジョナサン・ハイト著、高橋洋訳、『社会はなぜ左と右にわかれるのか——対立を超えるための道徳心理学』、紀伊國屋書店、2014.